

小松市

島 遺 跡

2019

石 川 県 教 育 委 員 会
(公財)石川県埋蔵文化財センター

しま
島 遺 跡

2019

石 川 県 教 育 委 員 会
(公財)石川県埋蔵文化財センター



遺跡遠景（南西から木場湖方向を望む）



調査区全景（南東から）



Ⅱ区全景（南西から）



SB1 完掘状況（北から）

例 言

- 1 本書は鳥遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 遺跡の所在地は石川県小松市鳥町地内である。
- 3 調査原因は北陸新幹線建設事業（金沢・敦賀間）で、同事業を所管する独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構鉄道建設本部大阪支社が、石川県教育委員会に発掘調査を依頼したものである。
- 4 調査は公益財団法人石川県埋蔵文化財センター（以下「県埋文センター」）が石川県教育委員会から委託を受けて、平成29(2017)年度から平成30(2018)年度にかけて実施した。業務内容は現地調査、出土品整理、報告書作成、報告書刊行である。現地調査については発掘調査作業及び空中写真測量図化作業等の関連作業をセントラル航業株式会社に委託し、県埋文センターの管理・監督のもと実施した。
- 5 調査に係る費用は、独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構鉄道建設本部大阪支社が負担した。
- 6 現地調査は平成29年度に実施した。期間・面積・担当（当時）は下記のとおりである。

期 間 平成29年4月13日～同年7月31日
面 積 1,920㎡
担 当 調査部 県関係調査グループ
熊谷業月（主幹）、鳥田亮仁（専門員）、佐々木華子（嘱託調査員）
- 7 出土品整理並びに報告書の作成は平成30年度に実施し、調査部 県関係調査グループが担当した。執筆・編集・刊行は鳥田が行った。
- 8 調査には下記の機関の協力を得た。

独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構鉄道建設本部大阪支社、小松市教育委員会
- 9 調査に関する記録と出土品は石川県埋蔵文化財センターで保管している。
- 10 本書についての凡例は下記のとおりである。
 - (1) 遺構実測図その他の方位は座標北であり、座標は国土交通省告示の平面直角座標Ⅶ系に準拠した。
 - (2) 水平基準は海拔高であり、T.P.（東京湾平均海面標高）による。
 - (3) 出土遺物番号は挿図、観察表、写真で対応する。なお、実測番号との対応については、出土遺物観察表に記載している。
 - (4) 遺物の実測番号は、土器・石製品・金属器の種類に関係なく連番号を付した。
 - (5) 遺物の名称は、下記の略記号に番号（算用数字）を付し表記した。

SB：掘立柱建物、SA：横列、SE：井戸、SK：土坑、SD：溝、P：柱穴・小穴、SX：その他
 - (6) 写真図版の遺構・遺物は、任意の縮尺である。

目次

第1章 調査の経緯と経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	2
第3節 整理作業の経過	3
第2章 遺跡の位置と環境	4
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	4
第3章 調査の成果	8
第1節 調査の概要	8
第2節 基本層序	8
第3節 遺構	10
1. 掘立柱建物	10
2. 欄列	13
3. 井戸	13
4. 溝	13
第4節 遺物	14
第4章 総括	40

報告書抄録

挿図目次

第1図 北陸新幹線(金沢・福井間)概略図	1	第17図 SB3 平面図・土層断面図 (S = 1/60)	26
第2図 調査区位置図	2	第18図 SB4・SB5 平面図・土層断面図 (S = 1/60)	27
第3図 遺跡位置図	4	第19図 SB6・SB7 平面図・土層断面図 (S = 1/60)	28
第4図 周辺の道路分布図	5	第20図 SB8・SB9 平面図・断面図 (S = 1/60)	29
第5図 基本層序	8	第21図 SB8・SB9 土層断面図 (S = 1/60)	30
第6図 主要遺構配置図 (S = 1/600)	9	第22図 SB10 平面図・断面図 (S = 1/60)	31
第7図 遺構配置図1 (S = 1/150)	16	第23図 SB10 平面図・土層断面図 (S = 1/20・S = 1/60)	32
第8図 遺構配置図2 (S = 1/150)	17	第24図 SB11・SB12 平面図・土層断面図 (S = 1/60)	33
第9図 遺構配置図3 (S = 1/150)	18	第25図 SB13・SA1・SA2 平面図・土層断面図 (S = 1/60)	34
第10図 遺構配置図4 (S = 1/150)	19	第26図 SE201・SE202 平面図・土層断面図 (S = 1/40)	35
第11図 遺構配置図5 (S = 1/150)	20	第27図 SD2・SD201・204・SD401 土層断面図 (S = 1/40)	36
第12図 遺構配置図6 (S = 1/150)	21	第28図 土器 (S = 1/3)	37
第13図 SB1 平面図・断面図 (S = 1/60)	22	第29図 土器・石製品・鉄滓 (S = 1/3)	38
第14図 SB1 土層断面図1 (S = 1/60)	23	第30図 主要遺構変遷図 (S = 1/1,000)	43
第15図 SB1 土層断面図2 (S = 1/60)	24	第31図 古墳時代から古代の主要遺構図 (S = 1/1,000)	44
第16図 SB2 平面図・土層断面図 (S = 1/60)	25		

表目次

第1表 調査・整理体制組織表	3	第3表 出土遺物観察表	39
第2表 遺跡地名表	7		

図版目次

巻頭図版1 道路造景(南西から水場窓を望む)・調査区全景(南東から)		から)Ⅱ区P261土層断面(西から)・Ⅱ区P264土層断面(北から)・Ⅱ区P273硬化層断面(東から)	
巻頭図版2 Ⅱ区全景(南西から)・SB1完掘状況(北から)		図版7 Ⅱ区SB10完掘状況(南から)・Ⅱ区P259土層断面(南西から)・Ⅱ区P259土器器皿出土状況(南から)・Ⅱ区SE201掘削状況(北東から)・Ⅱ区SE201断割り断面(南西から)	
図版1 調査区モザイク写真		図版8 Ⅱ区SE202完掘状況(西から)・Ⅱ区SD204完掘状況(東から)・Ⅱ区SD204a土層断面(東から)・Ⅱ区SD203完掘状況(南から)・Ⅱ区SD203b土層断面(北から)	
図版2 Ⅰ区遺構完掘状況(真上から)・Ⅰ区遺構完掘状況(北西から)		図版9 Ⅲ区遺構完掘状況(真上から)・Ⅲ区遺構完掘状況(南東から)・Ⅲ区SB13完掘状況(南から)・Ⅲ区SD401完掘状況(南から)・Ⅲ区SD401遺物出土状況(東から)	
図版3 Ⅰ区SB1完掘状況(南から)・Ⅰ区P14土層断面(西から)・Ⅰ区P14硬化層断面(西から)・Ⅰ区SD2完掘状況(西から)・Ⅰ区SD2a土層断面(東から)		図版10 出土遺物	
図版4 Ⅱ区遺構完掘状況(真上から)・Ⅱ区遺構完掘状況(南から)			
図版5 Ⅱ区SB2柱穴段下1層状況(北から)・Ⅱ区SB2完掘状況(北から)			
図版6 Ⅱ区SB3完掘状況(南から)・Ⅱ区SB2検出状況(北			

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

高遺跡の発掘調査は、鉄道建設・運輸施設整備支援機構を建設主体とする北陸新幹線建設事業に伴い、石川県教育委員会及び(公財)石川県埋蔵文化財センター(以下「県埋文センター」)により実施されたものである。

北陸新幹線は「国民経済の発展及び国民生活領域の拡大並びに地域の振興を図るため、全国新幹線鉄道整備法に基づき建設される新幹線鉄道」である。平成9(1997)年には東京駅から長野駅まで部分開業しており、更に、平成27年には長野駅から金沢駅までの区間が開業された。それに伴い、石川県内では平成10～22年度にかけて、津幡町地内から白山総合車両所の区間まで発掘調査が実施された。そのような中で、福井県の敦賀までの延伸が決まり、金沢から敦賀までの区間の整備を、平成24年6月に国土交通省による認可を受けて事業が開始されることとなった。同年8月には、北陸新幹線(金沢・敦賀間)建設工事が着工し、8月19日には起工式が行われている。その後、平成27年1月に政府において平成37年度の完成・開業を3年前倒し、平成34年度の開業を目指すことが決定された。

白山総合車両所から福井県境までの工事計画範囲における埋蔵文化財の取り扱いについては、鉄道建設・運輸施設整備支援機構鉄道建設本部大阪支社(以下「事業者」)から石川県教育委員会文化財課(以下「県文化財課」)に照会があり、県文化財課は計画範囲内に22ヶ所の埋蔵文化財包蔵地が存在することを回答した。また、周知の埋蔵文化財包蔵地については、文化財保護法第94条に基づき発掘調査等の保護措置が必要となる。



第1図 北陸新幹線(金沢・福井間)概略図

その後、双方の話し合いにより、用地買収が済んで試掘を実施する環境が整った範囲から順に、分布調査、試掘等を実施することとなった。その結果、16遺跡について本調査の必要が決定された。

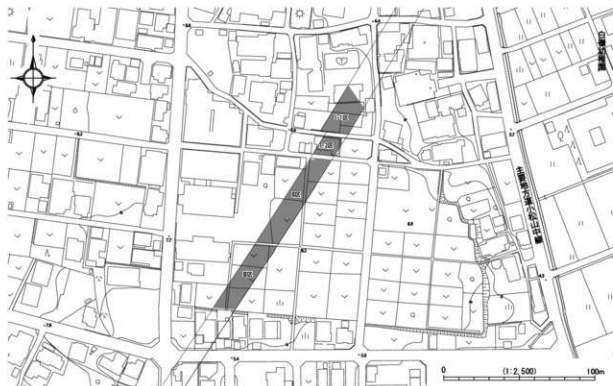
平成25年度には白山総合車両所内の本線部分に係る宮保B遺跡や北出遺跡の本調査が実施された。また、平成27年度では新幹線小松駅舎部分の八日市地方遺跡の調査が実施され、平成28年度以降本格的に調査が実施された。

県埋文センターは、金沢・敦賀間の平成34年度中の開業を見据えて、試掘結果から埋蔵文化財調査が膨大な調査面積となるため、調査の効率化と期間短縮を目的に、平成28・29年度に民間会社による調査支援を導入した。その主な委託内容は、仮設建物等の整備、現場の保守・管理、基準杭の設定、発掘機材の準備、作業員への指示・安全管理、図面等の作成、台帳等の作成、空中写真測量などである。

第2節 調査の経過

高遺跡の発掘調査は平成29年4月1日には事業者と石川県、石川県と県埋文センターの間で委託契約を締結し、県埋文センターからは発掘届を県文化財課に提出した。なお、調査体制は第1表のとおりである。

現地調査は、平成29年4月13日から同年7月31日にかけて実施した。調査面積は1,920㎡(当初1,730㎡)で、4月6日に事業者、県文化財課、県埋文センター、支援業者による現地打合せを行い、調査工程、調査範囲、事務所、作業ヤード、排土置場、排水処理、現地作業での注意点を協議・確認した。この時点で、既に事業者によって事務所・駐車場用地の造成は整っており、残土置場についても耕作土と発掘調査で掘削した土砂が混じらないように土木シートが設置されていた。調査は調



第2図 調査区位置図

査区をⅠ～Ⅲの3地区に分けて、工程や残土置場の状況を考慮し、Ⅱ区→Ⅲ区→Ⅰ区の順序で実施した。4月13日よりⅡ区から重機による表土除去を順次行い、調査地の隣接地に残土置場として借地されていた場所へ運搬し、残土処理を行った。4月20日から平面直角座標第Ⅷ系（日本測地系）をもとに10m方眼のグリッドを設定した。4月24日から作業員による遺構検出を開始し、その結果、古墳時代末から中世の建物遺構や溝などを検出した。天候にも恵まれ、調査は順調に進み、5月24日に第1回目（Ⅱ区）のラジオコントロールヘリコプターによる空中写真測量を実施し、6月20日に第2回目（Ⅲ区）、7月13日に第3回目（Ⅰ区）を実施した。なお、Ⅰ区を調査中に遺構が調査区北側に広がる様相を示すに至り、県文化財課との協議の結果、試掘調査を再度実施した。その結果、遺構が北側に広がることを確認したため、当初より190m増え、調査面積は1,920㎡となることとなった。7月9日に現地説明会を実施し、掘立柱建物や井戸などの主要遺構について説明を加えた。参加者は70名であった。7月25日に現地作業を終了し、埋め戻しの必要が無いため、現状で7月31日に事業者へ引渡し、現地調査を完了した。

第3節 整理作業の経過

事業者から依頼を受けた県教委の委託事業として、出土品整理作業として洗浄作業までを平成29年度に、記名・分類・接合、実測・トレース、遺構図トレースの各作業を平成30年度にそれぞれ実施した。発掘作業と同様に県埋文センターに委託され、調査部県関係調査グループが担当した。報告書刊行についても、平成30年度に原稿執筆、図版作成、出土品の写真撮影を行い、編集・校正等作業を経て刊行することとなった。

第1表 調査・整理体制組織表

調査期間	平成29年4月13日～同年7月31日	整理期間	平成30年4月2日～平成31年3月31日（契約期間）
調査主体	（公財）石川県埋文センター 理事長 田中新太郎	調査主体	（公財）石川県埋文センター 理事長 田中新太郎
総括	柴田 正秋（専務理事）	総括	紺野 欽一（専務理事）
事務	釜沢 利雄（事務局長）	事務	釜沢 利雄（事務局長）
総務	横山 謙一（総務グループリーダー）	総務	山口 登（総務グループリーダー）
	藤田 邦雄（所長）		藤田 邦雄（所長）
調査	垣内 光次郎（調査部長）	調査	垣内 光次郎（調査部長）
	久田 正弘（県関係調査グループリーダー）		久田 正弘（県関係調査グループリーダー）
担当	熊谷 葉月（県関係調査グループ主幹）	担当	島田 亮仁（県関係調査グループ専門員）
	島田 亮仁（県関係調査グループ専門員）		
	佐々木華子（県関係調査グループ嘱託調査員）		

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

高遺跡は石川県小松市島町地内に所在する。小松市は南北に長く、北は日本海、東に能美市・白山市、南に福井県勝山市に、西に加賀市に隣接している。市域は371.05km²を有し、人口は2018年12月時点で108,783人を数える。2004年までは増加傾向にあったが、2005年の109,084人をピークにそれ以降減少に転じている。

高遺跡が立地する月津台地は、東側に木場潟、北側に今江潟、西側に柴山潟の加賀三湖に三方を囲まれて、南北へ延びるように横たわっている。これらの潟湖では豊かな恵みと水郷風景をとどめていたが、昭和の国営干拓により今江潟と柴山潟の約6割が消滅し、その景観も大きく損なわれた。月津台地の南方は江沼丘陵と接しており、更に加越山地の山並みが控えている。

月津台地は第四紀に形成された中位段丘で、標高は概ね10m程度を測り、高い場所でもおよそ26mである。このため、起伏が小さく、なだらかな景観を形成している。



第3図 遺跡位置図

第2節 歴史的環境

月津台地とその周辺で最も古い人類活動の痕跡が確認できるのは、念仏林遺跡(26)から発見された旧石器時代から縄文時代草創期の土槍がある。しかし、集落の実態は不明で、数点の石器が散点的に発見されるにとどまる。

縄文時代前期に至っても遺跡数は少なく、柴山潟に面した早期末からの遺跡である柴山水底貝塚遺跡や、木場潟に面した前期の大谷山貝塚(59)など小規模集落が散見されるにすぎない。縄文時代中期になるとようやく本格的に台地上に遺跡が進出するようになる。月津台地東縁の木場潟に面する遺跡群として五郎座貝塚(57)、今江五丁目遺跡(55)、符津A・B遺跡(38・39)などがあり、柴山潟に面する遺跡群として額見町遺跡(33)、額見町神社前B遺跡(35)、茶白山A遺跡などがあり、馬渡川が形成した開析谷周辺の遺跡群として念仏林遺跡、念仏林南遺跡(27)、月津新遺跡(30)などの、大きく3グループの遺跡群が展開する様相が認められる。五郎座貝塚では石鏃、石匙、石錘に加え石棒や石剣などの多様な呪具が出土している。念仏林遺跡では大型堅穴建物が発見され、集落構造を考える上で貴重な調査となった。また、多くの石錘が出土していることから、近隣の潟湖では漁労活動を盛んに営んでいたことも判明した。その他としては、念仏林南遺跡で狩猟用の落とし穴土坑が確認されている。このように、遺跡の展開が隆盛であった縄文時代中期だが、縄文時代後期以降になると、遺跡数が再び減少し、念仏林遺跡や串町遺跡(37)などで遺物が散点的に発見されるにとどまる。



第4図 周辺の遺跡分布図 (S=1/25,000)

弥生時代前期から中期は、遺跡の分布が認められない空白期である。台地以外の遺跡としては、芝山湯に面した柴山出村遺跡（前期～中期）がある。後期になると遺跡数が増加し、念仏林南遺跡、額見町西遺跡などの小集落が営まれるようになる。

古墳時代前期では遺跡数が希薄で、月津台地最大級の前方後円墳である白のほろ古墳(36)が4世紀末にさかのぼる可能性があるものの、根拠に乏しく確実な年代決定には至っていない。古墳が本格的に築造され始めるのは5世紀末葉以降である。5世紀末葉から6世紀後葉にかけて古墳群が形成されるようになり、これらの古墳群を総称して三湖台古墳群と呼称される。古墳群は地域により大きく3群に分けることができる。月津台地の北端に分布する5世紀末葉の前方後円墳である御幸塚古墳(52)や、切石組合石棺を有するとみられる狐山古墳(51)などから構成される一群、柴山湯に面する台地上に分布する二段築成の円墳である茶白山古墳の一群、馬渡川による開析谷周辺の埴輪を伴う矢田野エジリ古墳(25)、家形石棺を有するとされる狐森塚古墳(8)、6世紀中葉の円墳で横穴式石室の構造を持つ丸山古墳(12)、矢田借屋古墳群(15)、矢田野古墳群(16)などの一群である。最も多くの古墳で構成されているのが馬渡川流域の一群で、6世紀初頭から6世紀後葉を中心とする築造である。矢田野エジリ古墳では、巫女や馬剣と馬などの形象埴輪が出土しており、馬剣と馬がセットで確認された初めての事例となった。前方後円墳と群集墓で構成された矢田借屋古墳群の中には加賀地方特有の主体部である粘土室を有する古墳が含まれており、バラエティーに富んでいる。これらの古墳群は江沼国造である江沼臣と関係が深い墓域と推定されている。

古墳時代終末期から古代になると台地の縁辺部を中心に集落遺跡が広く展開するようになる。これらの集落群は分布域から大きく4グループに分けることができる。柴山湯に面する額見町遺跡を中心とする一群として額見町遺跡、額見町西遺跡、茶白山祭祀遺跡があり、馬渡川流域の一群として矢田・矢田野遺跡(14)、矢田新遺跡(11)があり、木場湯に面する一群として鳥遺跡(1)、符津C遺跡(40)、薬師遺跡(42)があり、串町付近で今江湯に注ぐ小支流流域の一群として狐山遺跡(50)、申カンノヤマA・B・C遺跡(44・45・46)が分布している。額見町遺跡は7世紀代初頭の出現以降、L字型カマドを付設する朝鮮系移民の存在を示す集落の特徴をもち、8世紀前半まで盛期をむかえる。矢田野遺跡は7世紀後葉から8世紀前半を中心に営まれた集落である。薬師遺跡と符津C遺跡は古墳時代末から古代にかけての集落遺跡で、木場湯に面する薬師遺跡からはL字型カマドを付設する堅穴建物が確認されており、額見町遺跡や矢田野遺跡周辺以外の地域から検出されたことで重要な調査となった。現在の地名から古代江沼郡の郷に比定できるものは、額見町遺跡を中心とする遺跡群は額見郷に、矢田遺跡などで構成される馬渡川流域の遺跡群は八田郷に関連する集落と推定されている。

月津台地に隣接する丘陵地には北陸最大規模の生産遺跡群が広く展開している。南加賀古窯跡群は5世紀末葉には既に成立していた製陶遺跡群で、盛衰を繰り返しながら室町時代まで操業している。生産された須恵器の製品は5～6世紀には江沼郡域のみならず能登地域などへ広範囲に供給されており、須恵器と埴輪の兼業生産も行われていた。また、製陶遺跡群と製鉄遺跡群はほぼ類似するような分布状況を示しており、8世紀を中心に全盛期を迎える。林遺跡(68)では10世紀の製鉄炉の近くから鋼の鋳型が出土しており、精錬から製品までの工程を一貫して行っていた様相がわかる貴重な発見となった。これらの古代生産遺跡群は月津台地上の集落遺跡の動態と相互に密接な関連性がある。

中世以降は、鳥羽院領額田荘と関連が推定される額見町遺跡周辺で11世紀後半から12世紀の集落跡が認められ、矢田新遺跡では15～16世紀の地下式坑を伴う集落が認められる。しかし、古代と比較すると集落の様相がはっきりせず、その動態は不明瞭である。なお、「鳥」の地名がはじめて文献に登場するのは、近世に入ってからで、能美郡粟津郷内の一村落として記載されている。

第2表 遺跡地名表

番号	遺跡名	種別	時代	番号	遺跡名	種別	時代
1	烏遺跡	集落	弥生、古墳、古代、中世	48	日本丸遺跡群	遺跡	近世
2	二ツ梨遺跡	散布地	古代	49	串遺跡	遺跡	中世
3	箱宮日遺跡	散布地	中世	50	狐山遺跡	集落	古墳
4	打越A遺跡	散布地	縄文	51	狐山古墳	古墳	古墳
5	打越B遺跡	散布地	弥生	52	御幸塚古墳	古墳	古墳
6	打越C遺跡	城郭	中世	53	上百古墳	古墳	古墳
7	刀何照遺跡	集落	縄文、古墳、古代、中世	54	上百遺跡	散布地	縄文
8	狐森塚古墳	古墳	古墳	55	今江五丁遺跡	集落	縄文、弥生、古墳、古代、中世
9	中村古墳	古墳	古墳	56	今江橋穴群	横穴墓	不詳
10	矢田野神社前遺跡	散布地	古代	57	五郎塚貝塚	貝塚	縄文
11	矢田野遺跡	集落	縄文、古代、中世	58	水場4号墳	古墳	古墳
12	丸山古墳	古墳	古墳	59	大谷山貝塚	貝塚	縄文、古代
13	無名古墳群	古墳	古墳	60	津成倉ナツジ遺跡	横穴墓	中世
14	矢田・矢田野遺跡	集落	縄文、古墳、古代、中世	61	津成倉神社遺跡	散布地	中世
15	矢田御厨古墳群	古墳	古墳	62	林船跡	城郭	中世
16	矢田野古墳群	古墳	古墳	63	林八幡神社跡	礎塚	中世
17	百人塚古墳	古墳	古墳	64	南口遺跡	散布地	古代
18	下栗津古橋穴群	横穴墓	不詳	65	円藤八幡神社前遺跡	散布地	古代、中世
19	下栗津2号横穴	横穴墓	不詳	66	円藤本寺跡	社寺跡	中世
20	鳥居塚	礎塚	不詳	67	林船跡寺跡	社寺跡	不詳
21	烏B遺跡	散布地	古代	68	林遺跡	遺跡、製鉄跡	古墳～古代
22	烏C遺跡	古墳	古墳	69	円津シヤザワ製鉄跡	遺跡、製鉄跡	平安
23	石山古墳	古墳	古墳	70	円津古宮跡群	遺跡	古代、鎌倉
24	新輪塚古墳	古墳	古墳	71	円津六ツヶ丘古宮跡群	遺跡	古墳
25	矢田野メグリ古墳	古墳	古墳	72	円津ワケニ遺跡	遺跡、製鉄跡	平安
26	念仏林遺跡	集落	縄文、弥生、古墳、古代、中世	73	円津ショウゴデニ遺跡	遺跡、製鉄跡	平安
27	念仏林前遺跡	集落	縄文、弥生、古墳	74	円津2号遺跡	遺跡	不詳
28	念仏林古墳	古墳	古墳	75	円津オオタニ遺跡	遺跡、製鉄跡	奈良
29	念仏塚古墳	古墳	古墳	76	二ツ梨一貫山古宮跡群	遺跡、製鉄跡	古代
30	円津新遺跡	散布地	縄文	77	二ツ梨豆岡山古宮跡群	遺跡	古墳、古代
31	円津A遺跡	散布地	古代	78	二ツ梨豆岡山古宮跡群	遺跡	古墳～古代
32	円津オカ遺跡	散布地	古墳、中世	79	二ツ梨船橋池山古宮跡群	遺跡	古墳、平安
33	額見町遺跡	集落、その他の墓	縄文、弥生、古墳、古代、中世	80	二ツ梨ダミノキバラ古宮跡群	遺跡	古代
34	額見神社前A遺跡	散布地	古墳	81	二ツ梨丸山古宮跡群	遺跡、製鉄跡	古墳
35	額見神社前B遺跡	散布地	縄文	82	二ツ梨時山古宮跡群	遺跡	古墳
36	白のはぎ古墳	古墳	古墳	83	二ツ梨東山古宮跡群	遺跡	古墳
37	中町遺跡	散布地	縄文、古代	84	二ツ梨船家遺跡	遺跡、製鉄跡	奈良
38	円津A遺跡	散布地	縄文	85	二ツ梨橋川遺跡	遺跡、製鉄跡	奈良
39	円津B遺跡	散布地	縄文	86	二ツ梨茶谷古宮跡群	遺跡	古代
40	円津C遺跡	集落	古墳、古代、中世	87	矢田野向山古宮跡群	遺跡	奈良、鎌倉
41	矢崎宮の下遺跡	集落	縄文、弥生、古墳、古代、中世	88	二ツ梨中ヤマイダニ遺跡	遺跡、製鉄跡	平安
42	基師遺跡	集落	縄文、弥生、古墳、古代	89	二ツ梨中ヤマニヤマ古宮跡群	遺跡	古墳、奈良
43	矢崎B古墳	古墳	古墳	90	上荒屋キダシ古宮跡群	遺跡	奈良
44	オウサンヤマA遺跡	散布地	古代	91	上荒屋トリダニ古宮跡群	遺跡、製鉄跡	奈良、鎌倉
45	オウサンヤマB遺跡	散布地	古墳	92	円津1～2号製鉄跡	製鉄跡	不詳
46	オウサンヤマC遺跡	散布地	古墳	93	矢田野長尾山遺跡	遺跡、製鉄跡	奈良、鎌倉
47	今江向ノ山遺跡	散布地	弥生	94	箱宮遺跡群	遺跡	奈良、中世

第3章 調査の成果

第1節 調査の概要

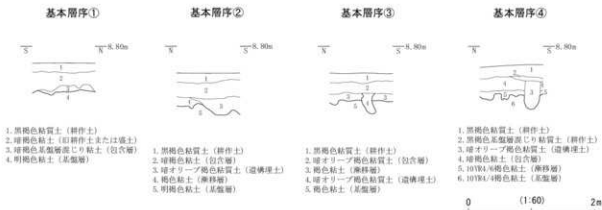
調査は、Ⅰ区（更にⅠ-1区とⅠ-2区に細分割）、Ⅱ区、Ⅲ区の3地区に分割して実施した。遺構番号は、掘立柱建物（SB）と欄列（SA）については新たにSB1～13とSA1～2をそれぞれ付けた。また、他の遺構（SE・SK・SD・P・SX）については、Ⅰ区はそのままの番号を、Ⅱ区は200を付加して201～、Ⅲ区は400を付加して401～として報告する。

遺構検出面は月津台地を形成する黄褐色系の粘土を主体とする基盤層の上面であり、概ねⅠ区で表土下15～45cm、Ⅱ区で30～60cm、Ⅲ区で45cmである。検出面は、標高7.7～8.0m前後で高低差がほとんどなく、ほぼ平坦である。遺構密度は、小穴が集中するⅠ-2区やⅢ区で高い傾向にあるが、その多くは柱穴とはならない小穴群である。このような中で、集落を形成する建物遺構の多くがⅡ区を中心として展開している様相が確認された。遺構の時期は大きく古墳時代終末期～奈良・平安時代と中世（鎌倉・室町時代）の2時期に分かれる。古墳時代終末期～奈良・平安時代では掘立柱建物3棟、欄列1条、溝などで構成されており、中世では掘立柱建物10棟、欄列1条、井戸2基、土坑、溝などを中心に構成されている。調査範囲が新幹線の路線幅（概ね12m幅）ということもあり、建物や欄列、溝などの遺構については調査区外に拡がるものが多い。

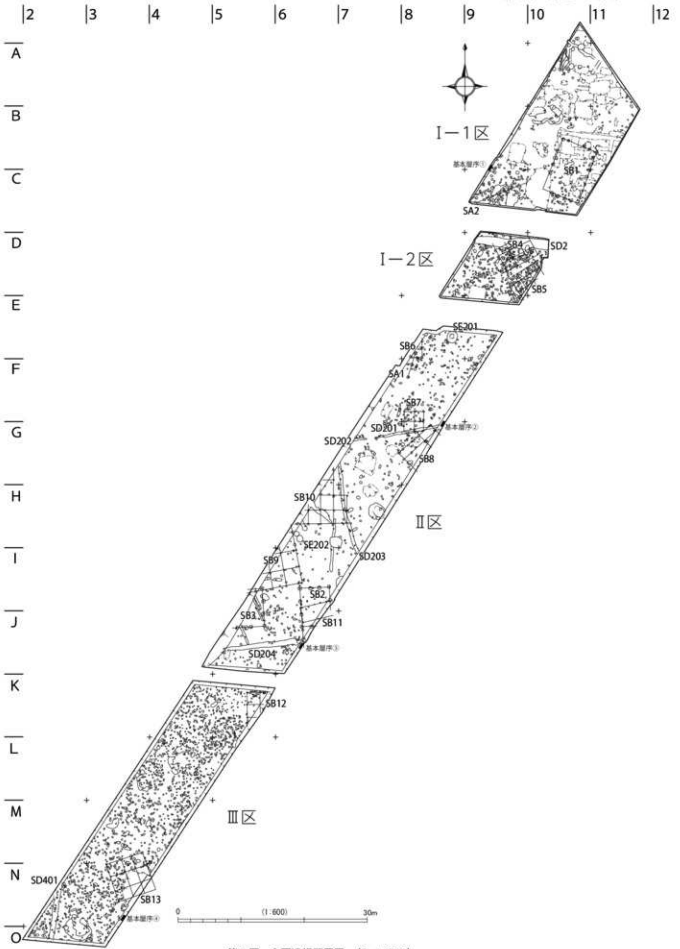
遺物は、古代の土師器や須恵器を中心に4箱が出土した。その他として古代の瓦や、中世の土師器や加賀焼がわずかに出土している。土器・陶磁器類以外では、石鉢の破片や鉄滓、銅銭が出土している。なお、本文中の古代土器の器種分類や時期については、田嶋明人の研究（田嶋1988）に準拠した。

第2節 基本層序

層序は、上位から表土（耕作土、客土）、暗褐色粘土（包含層）、褐色粘土（漸移層）、明褐色粘土（基盤層）を基本としている。調査区のⅠ区では宅地のため、著しく削平を受けており、そのため包含層の遺存度も良好でない。Ⅱ区とⅢ区では畑や園地であったため、包含層が良好に分布しており、包含層と基盤層の間に存在する漸移層も良好である。



第5図 基本層序 (S=1/60)



第6図 主要遺構配置図 (S=1/600)

第3節 遺 構

1. 掘立柱建物

掘立柱建物は、すべての調査区から認められたが、Ⅱ区を中心に建物群としてのまとまりが看取された。時期別にみると、古墳時代終末期に相当する掘立柱建物がⅠ-1区で1棟、奈良・平安時代でⅡ区の2棟、中世で、Ⅰ-2区の2棟、Ⅱ区の6棟、Ⅲ区の2棟を確認した。古墳時代終末～奈良・平安時代は、側柱構造の建物（SB1～SB3）で構成されており、中世では総柱構造の建物（SB4～SB13）が主体となる。建物規模や形態は多様なタイプが認められた。また、柱筋が整然と並ばないものも少なからず存在した。なお、確認した掘立柱建物の他に、柱穴の可能性のあるものが認められることから、さらに多くの建物が存在していた可能性が指摘できる。

SB1（第13～15図、図版3）本遺跡で建物規模が判明している数少ない掘立柱建物の一つである。Ⅰ-1区のB10・B11・C10グリッドで、表土（宅地を造成した客土）直下で検出した。標高約7.95mを測る。桁行8間（8.6m）×梁行5間（5.8m）の規模を有する側柱建物で、後世の削平や攪乱によってすべての柱穴は確認されていない。床面積は49.8㎡である。建物主軸はN-20°-Eである。柱間寸法は桁行・梁行ともにほぼ同寸で、約1.1mで統一されている。検出面からの柱穴の深度にばらつきがあるが、全体として南側に向かって深い傾向にあり、底面は標高7.51～7.70mを測る。平面は円～楕円形を呈し、長径40～75cm、短径27～62cm、深さ11～38cmを測る。柱根は遺存していないものの、P14のように柱痕跡が明瞭に観察できる柱穴が一定量存在した。また、柱の当りに相当する部分には粘土と砂粒を混ぜて充填したと推定される硬化部分が認められ、地山との間には酸化鉄が薄く沈着している。これについては、根固めや柱を安定させることの他に、湿気を防ぐ役割などが考えられる。柱穴からは、時期を決定できるような遺物の出土は無いが、柱間寸法がSB2やSB3と比較して狭い傾向にあることから、やや古相を示している。包含層からは古墳時代終末期の須臾器が散点的に出土していることから、SB1は古墳時代終末期に帰属すると推定される。なお、SB1周辺には同様な柱間寸法を有する掘立柱建物は確認されていない。

SB2（第16図、図版5・6）Ⅱ区の南側I6・J6グリッドで、標高約7.85mを測る。桁行4間以上×梁行3間の規模を有する側柱建物で、間仕切柱が付随する。桁行が数間分拡がる可能性があるが調査区外であるため不明である。建物主軸はN-5°-Wである。桁行8.0m、梁行4.7mで、現存床面積37.6㎡である。柱間寸法は桁行2.0m、梁行1.5～1.6mを測る。柱穴の平面は円～隅丸方形を呈し、長径51～61cm、短径43～66cm、検出面からの深さ8～28cmを測る。柱根は遺存していないものの、柱痕跡がほとんどの柱穴で観察され、特にP261は残存状態が良好であった。柱穴の底面には根固めなどのために柱の当りに相当する部分に白色粘土と砂粒を混ぜて充填した硬化部分が認められた。なお、間仕切柱のP269は他の柱穴と比較して掘方がやや深く掘り下げているものの、硬化部分は認められなかった。柱穴規模や柱間寸法、主軸方向などからSB3やSD204と一連の遺構群と考えられる。SD204からは、Ⅳ2古～Ⅴ1期と考えられる坏蓋(3)が出土しているため、同時期の可能性が高いと推定される。

SB3（第17図、図版6）Ⅱ区の南側I5・J5グリッドで、標高約7.90mを測る。確認できる規模は南北方向3間以上×東西方向2間以上の側柱建物で、調査区外へ拡がる可能性が高い。建物主軸はN-4°-Wである。南北方向6.0m、東西方向約4.4mで、現存床面積は26.4㎡を測る。柱間寸法は南北方向2.0m、東西方向約2.2mで、東西方向がわずかに長い。柱穴の平面は円～隅丸方形を呈し、長径

50～70cm、短径47～60cm、検出面からの深さ41～55cmを測る。SB1と比較した場合、柱間寸法が長く、柱穴に深さがある。柱根は遺存していないものの、柱痕跡がほとんどの柱穴で観察できた。また、柱穴の底面ではSB1の柱穴同様に、根固めした硬化部分が認められた。SB1とSD204において主軸が一致することから同時期併存と考えられる。

SB4 (第18図) I-2区の北側D9グリッドで、標高約7.90mを測る。確認できる規模は南北方向3間以上×東西方向3間以上の総柱建物で、北側と東側をSD2によって切られている。建物主軸はN-30°-Wである。南北方向3.9m、東西方向5.6mで、柱間寸法は南北方向1.2～1.5m、東西方向1.8～1.9mを測る。柱穴の平面は円～楕円形を呈し、長径23～45cm、短径18～30cm、検出面からの深さ6～37cmを測る。柱根や柱痕跡、柱の当たりの硬化部分は認められない。南側に展開するSB5と主軸が同じであることから、建て替えの可能性が指摘できるが、先後関係は不明である。また、北側のSA1とも近似した軸方向を示していることから、同時期の可能性が高い。古代の掘立柱建物であるSB1～SB3と比較した場合、柱穴が小規模であることから中世に帰属すると推定される。

SB5 (第18図) I-2区の南側D9・D10グリッドで、標高約7.90mを測る。確認できる規模は南北方向2間以上×東西方向3間以上の総柱建物で、北西端の柱穴は確認できなかった。建物主軸はN-37°-Wである。南北方向2.4m、東西方向4.9mを測る。柱間寸法は南北方向1.0～1.5m、東西方向1.5～1.7mで、南北方向でばらつきがあり、柱筋が整わない箇所も認められた。柱穴の平面は円～楕円形を呈し、長径20～36cm、短径16～29cm、検出面からの深さ11～35cmを測る。SB4と同様に柱根や柱痕跡、柱の当たりの硬化部分は認められない。SB4とはほぼ同軸であるが、近接して構築されているため、同時期併存の可能性は低い。建て替えの可能性が指摘できるが、先後関係は不明である。

SB6 (第19図) II区の北端E8グリッドで、標高約7.85mを測る。確認できる規模は南北方向1間以上×東西方向1間以上の建物で、大部分の範囲が調査区外となる。建物主軸はN-8°-Wである。柱間寸法は南北方向約2.6m、東西方向1.6mであり、柱筋の通りが良好でない箇所も認められた。柱穴の平面は円～楕円形を呈し、長径29～41cm、短径24～35cm、検出面からの深さ12～35cmを測る。SB4と同様に柱根や柱痕跡、柱の当たりの硬化部分は認められない。柱穴は平面プランが明確で、深さもあることから、掘立柱建物と認定した。主軸が後述するSB10とはほぼ同じであることから同時期の可能性が指摘できる。

SB7 (第19図) 本遺跡で建物規模が判明している数少ない掘立柱建物である。II区の北側F8・G8グリッドで、標高約7.85mを測る。桁行2間×梁行2間の総柱建物である。柱間寸法は桁行が3.1m、梁行は3.0mで、床面積は9.3㎡を測る。柱間寸法は桁行が1.5m～1.6mとほぼ同寸であり、梁行は1.4～1.6mである。他の建物と比較して小規模である。柱穴の平面は概ね円形を呈し、長径24～38cm、短径20～27cm、検出面からの深さ18～29cmを測る。建物主軸はN-1°-Eである。SD201と切り合い関係にあるが、先後関係は判然としない。建物主軸はSB10と同軸であることから同時期の可能性が指摘できる。

SB8 (第20・21図) II区の北側G7・G8グリッドで、標高約7.80mを測る。確認できる規模は北東方向3間×南東方向2間以上の総柱建物である。柱穴は直交する個所のすべてに存在しておらず、柱筋が整わない箇所が認められる。建物主軸はN-48°-Eである。北東方向6.7m、南東方向2.7mで、柱間寸法は南北方向1.3～1.4m、東西方向2.0～2.5mを測る。柱穴の平面は楕円形を呈し、長径31～39cm、短径15～30cm、検出面からの深さ16～40cmを測る。SB7と近接しているが、切り合い関係が無いため、先後関係は不明である。柱穴規模や柱間寸法の特徴などから中世に帰属すると推定さ

れる。

SB9 (第20・21図) II区の中央からやや南寄りのH6・I5・I6グリッドで、標高約7.85mを測る。確認できる規模は南北方向3間以上×東西方向3間以上の総柱建物である。建物主軸はN-10°-Wである。柱筋は他の中世の建物よりも整っている。南北方向8.3m、東西方向7.5mを測る。柱間寸法は南北方向2.6～3.0m、東西方向2.2～2.8mを測り、全体としてばらつきがある。柱穴の平面は円～楕円形を呈し、長径20～44cm、短径18～34cmを測る。SB4と同様に柱根や柱痕跡、柱の当たりの硬化部分は認められない。SB10と重複するため、建て替えの可能性が指摘できるが、先後関係は不明である。SB11とは建物主軸が近似しているため、同時期併存の可能性が高く、SB9が母屋的でSB11が副的な建物機能が想定される。また、東側9mほどに南北方向に走るSD203があり、主軸が近似しているため、区画溝として同時期に存在していたことが推定される。柱穴規模や柱間寸法の特徴などから中世に帰属すると推定される。

SB10 (第22・23図、図版7) II区の中央付近G6・H6・H7グリッドで、標高約7.85mを測る。確認できる規模は南北方向4間以上×東西方向3間以上の総柱建物で、東側に1間×2間の庇状の張出し部分を有する。建物主軸はN-1°-Eである。柱筋は他の中世の建物と比較して整っている。南北方向8.5m、東西方向8.1mであり、柱間寸法は南北方向1.6～2.4m、東西方向1.8～2.3mを測る。柱穴の平面は円～楕円形を呈し、長径18～49cm、短径15～28cm、検出面からの深さ10～37cmを測る。P259の柱穴では、中世土師器皿(33)の中に焼土塊を入れ、ほぼ正位の状態を確認された。柱を抜き取った後に埋納したとみなされ、地鎮などの祭祀が行われたことが推定される。土師器皿は13世紀後半の年代観が得られていることから、建て替えや放棄の為に解体・廃絶した時期が13世紀後半以降ということが想定される。SB9と近接するため、建て替えの可能性が指摘できるが、先後関係は不明である。また、南側に位置するSE202の底面付近の平面プランが、隅丸方形に成形されており、主軸がSB10に近似している。このため、SB10に付随する井戸の可能性が高い。なお、SE202からは13世紀代の加賀焼(36)が出土していることから、時期的にも整合的である。

SB11 (第24図) II区の南側I6・J6グリッドで、標高約7.80mを測る。確認できる規模は桁行2間以上×梁行1間の側柱建物である。建物主軸はN-80°-Eである。桁行4.3m、梁行2.4mで、現存床面積は11.3㎡であった。柱間寸法は桁行1.9～2.4m、梁行2.4mを測る。柱穴の平面は円～楕円形を呈し、長径15～27cm、短径13～25cm、深さ6～25cmを測る。SB9と主軸が近似しているため、同時期併存の可能性が高い。

SB12 (第24図、図版9) III区の北端K5グリッドで、標高約7.85mを測る。確認できる規模は南北方向2間以上×南東方向1間以上の建物である。建物主軸はN-1°-Wである。北東方向4.0m、南東方向2.0mで、柱間寸法はいずれも2.0mを測る。柱穴の平面は楕円形を呈し、長径22～27cm、短径20～22cm、検出面からの深さ17～38cmを測る。柱筋は概ね整っている。P536からは14～15世紀の中世土師器皿(34)が出土している。

SB13 (第25図、図版9) III区の南側M3・N3グリッドで、標高約8.00mを測る。建物の南側は後世の攪乱によって大きく失われている。規模は桁行3間×梁行3間の総柱建物である。柱間寸法は桁行6.2m、梁行6.0mで、現存床面積は37.2㎡を測る。柱筋は他の中世の建物と比較して整っている。建物主軸はN-17°-Wである。柱間寸法は桁行1.8～2.4m、梁行1.8～2.3mを測る。柱穴の平面は円～楕円形を呈し、長径17～45cm、短径15～39cm、深さ13～23cmを測る。西側の柱筋の柱穴は他のものと比較して小規模であり、特徴的である。SB9と主軸が近似しているため、同時期の可能性が高い。

2. 柵 列

柵列はⅠ-1区で1条、Ⅱ区で1条の計2条を確認した。

SA1 (第25図) Ⅱ区のE8・F8グリッドで、標高約7.85mを測る。確認できる規模は3基であり、調査区外へ広がる可能性がある。主軸はN-16°-Eである。小穴間寸法は約2.0mで、現存延長は4.0mである。小穴の平面は円～楕円形を呈し、長径41～51cm、短径40～49cm、検出面からの深さ29～44cmを測る。柱痕跡がすべての小穴で観察できた。小穴の形態や埋土などから古代に帰属する可能性が高く、SB1に主軸方向が近似している。また、小穴底面には硬化部分が認められることから、掘立柱建物を構成する柱穴の可能性もある。ここでは、平面プランが調査区外に広がるなど未確定な要素があるため柵列として報告しておく。

SA2 (第25図) Ⅰ-1区のC9グリッドで、標高約7.90mを測る。確認できる規模は6基で構成されており、西側は調査区外へ、東側は攪乱のため全体を把握するには至っていない。主軸はN-70°-Eである。小穴間寸法は1.30～1.50mで、現存延長は7.7mを測る。小穴の平面は円～楕円形を呈し、長径21～52cm、短径18～32cm、検出面からの深さ9～28cmを測る。SB4と主軸が近似しているため、同時期の可能性が高い。なお、このSA1より北側では、明確な建物跡が確認されないことから、SA1が建物域との境界を示していることが推定される。

3. 井 戸

井戸は計2基であり、いずれもⅡ区で確認した。

SE201 (第26図、図版7) Ⅱ区の北端E8グリッドで、標高7.85mを測る。平面は楕円形で、掘方の上位約3/4はやや重なる円筒状、下位約1/4は直径約0.85mの円筒状を呈する。長径1.84m、短径1.58m、検出面からの深さ2.38mを測る。底面には外径80cm、内径45cmの環状に酸化鉄が沈着した痕跡が認められたことから、水溜用の曲物などを設置していたことが推定される。なお、土層断面を観察したが、堆積状況からは明確な井戸枠の存在を示す根拠は得られなかった。埋土は黒褐色粘土を基調とするが、下位約15cmに有機質土が堆積している。SE201からは古代の土師器や須臾器、瓦(31)に加え、13世紀代の加賀焼の甕(36)が出土している。

SE202 (第26図、図版8) Ⅱ区の中央付近H6・H7グリッドで、標高7.77～7.79mを測る。平面は円形で、掘方は上位約3/4は円筒状、下位1/4は四角柱状を呈する。長径1.86m、短径1.74m、検出面からの深さ1.59mを測る。底面を隅丸方形に丁寧に整形しており、一辺約1.1～1.2mを測る。底面を隅丸方形に造り出していることから、板組の井戸枠構造が推定される。埋土は黒褐色粘土を基調とするが、下位約20cmは砂層が堆積している。主軸がSB10に近似しているため、SB10に付随する井戸の可能性が高い。出土遺物は13世紀代の加賀焼の甕(37)が出土していることから、SB10(P259出土の中世土師器皿から13世紀後半)の年代観とも矛盾しない。

4. 溝

溝は調査区全体に分布しているが、Ⅱ区でややまとまって検出している。

SD2 (第27図、図版3) Ⅰ-2区の北側D9・D10グリッドで、標高7.8mを測る。現存長11.5m、幅1.10～1.40m、検出面からの深さ0.76～0.82mを測る。東西方向に直線的に伸びる溝で、主軸が現在の地割に沿っている。断面は上位1/3～1/4程度は勾配が緩く、下位ほどやや勾配のあるV字状を呈する。埋土は黒褐色粘土を基調とし、水流による堆積状況は認められない。底面の勾配は西側か

ら東側に向かって緩やかに低くなっている。平面プランが直線的であるため区画を意識して構築したと推定される。遺物には須恵器(3)、土師器(29)、瀬戸・美濃の天目茶碗(35)、石鉢(38)の破片があり、須恵器と土師器は混入品とみなされる。天目茶碗は大室期の所産と推定されており、溝の埋土も掘立柱建物の柱穴の埋土とはやや異なるため、中近世以降に帰属すると考えられる。

SD201・202 (第27図) II区の北側G7・G8グリッドを東西方向に直線的に延びる小規模な溝である。SD202はSD201の延長上にあり、規模や形態が類似していることから、同一遺構の可能性が高い。SD201で現存長13.6m、幅0.31～0.57m、検出面からの深さ0.10～0.13mを測る。SD202で現存長2.20m、幅0.27～0.34m、深さ0.05～0.11mで、断面はいびつな半円形を呈し、埋土は黒褐色～暗褐色粘質土を基調とする。底面の高低差はほとんどなく、水流による堆積状況は認められなかった。出土した土器は、そのほとんどが小片の個体である。また、SB9と主軸が近似しているため、区画溝として機能していたと考えられる。埋土や建物配置などから中世に帰属すると推定される。その他に、南北方向に延びるSD203とも調査区外で直交することから、SD203も同時期に存在していた可能性が高い。

SD203 (第27図、図版8) II区の中央G6・H7・I7グリッドを南北方向に直線的に延びる小規模な溝である。現存長14.4m、幅0.40～0.48m、検出面からの深さ0.06～0.12mを測る。断面はいびつな半円形を呈し、埋土は暗褐色粘質土を基調とする。底面の高低差はほとんどなく、水流による堆積状況は認められなかった。SB9とは、SD201・202と同様に主軸が近似しているため同時期に存在していたと考えられる。埋土や建物配置などから中世に帰属すると推定される。

SD204 (第27図、図版8) II区の南側J5・J6グリッドを東西方向に直線的に延びる溝である。現存長11.6m、幅0.52～0.87m、検出面からの深さ0.14～0.33mを測る。断面は逆台形を呈し、埋土はオリブ褐色粘質土を基調とする。底面の高低差は西側から東側に向かって低く、水流による堆積状況は認められなかった。東端はSB1の手前で途切れており、主軸方向も直交することから、SB1と同時期併存で、区画を意識して構築されたと推定される。なお、この溝より南側は明確な古代の遺構は認められなかった。遺物には破片ではあるが須恵器の坏蓋(3)があり、他に鉄滓(40)が出土している。

SD401 (第27図、図版9) III区の南側N2・O2グリッドを南北方向に直線的に延びる溝である。現存長7.9m、幅0.69～0.98m、検出面からの深さ0.15～0.26mを測る。断面は半円形を呈し、埋土はオリブ褐色粘質土を基調とする。水流による堆積状況は認められなかった。底面の高低差は南側が高く、北側が低い。遺物には須恵器(19)や土師器が出土している。平成23年に小松市教育委員会が実施した調査の11号溝と同一の溝と推定される。

第4節 遺 物

遺物 (第28・29図、図版10) 出土遺物はパンケースで4箱あり、出土量としては多くない。また、遺構出土の遺物となると極めて少ない状況である。古墳時代終末期では須恵器が、古代では土師器、須恵器、瓦が、中世では土師器皿、加賀焼、越前焼、瀬戸・美濃が、近世では陶磁器がそれぞれ出土している。また、石製品では石鉢、砥石が認められ、他に鉄滓も出土している。遺物の多くは包含層出土のもので、古代の土師器や須恵器が主体となる。

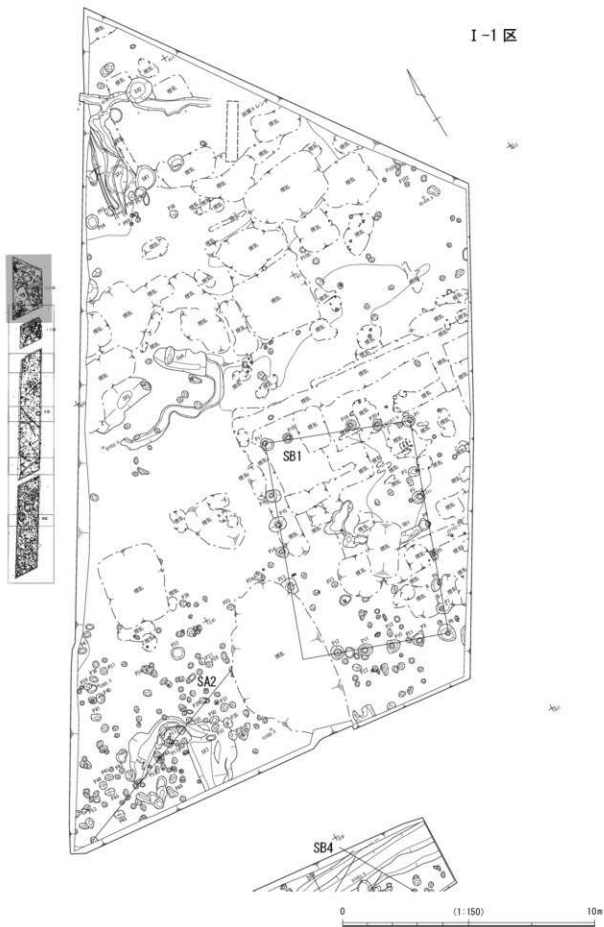
1～24は須恵器である。1～4は坏蓋で、1・2はかえりを有するタイプ。1で直径が11.0cmである。2の器壁は肉厚で、天井部外面には砂粒が全面に付着している。窯から集落内に直接持ち込まれたも

のとみられ、製品として流通していたものではないと推定される。3はSD204から出土した個体で、口縁端部が欠損しているが、端部が垂下するタイプとみられる。IV2古～V1期の所産と考えられる。4は内面にはヘラ記号が認められる。5～6は無高台の坏身で、5は尖底気味の底部から、屈曲して体部が内湾気味に緩く立ち上がる。6は焼き膨れのため底部がやや厚く円化されている。7は6と同様に口縁部が外反気味に立ち上がる。8～11は高台を有する坏で、高台の形状は8で八字状に開き、9は踏ん張り、11は三角形をそれぞれ呈する。9の高台内の見込みにはヘラ記号が認められる。12・13は無高台の盤で、12で口径15.5cm、13で16.4cmを測る。14～15は短頸壺で、肩の張るタイプである。16は蓋とみられる個体で、直径23.8cmと大型の部類に入る。当初は盤の可能性も考えたが、外面全体に降灰が認められることから蓋として報告しておく。17は長頸瓶の肩部で、屈曲部付近には一条の圏線が巡る。18は壺の底部で、外面がケズリ調整で、「×」のヘラ記号が認められる。19・20は有高台の壺の底部である。高台断面が三角形を呈する。21～23は甕の口縁部で、22は外面平行タキ調整、23は外面にヘラ状工具による文様が施される。24は甕の胴部で、外面に溶着物が認められ、焼台として使用されていたと考えられる。25～30は土師器である。25は赤彩された椀の底部で、外面は丁寧なクロクロナデ調整である。26はミニチュア土器の鉢である。脆弱な個体であり内外面ともに著しく剥離しており調整は不明である。27～29は甕で、27・28は口縁端部が三角状に上方につまみ上げる。29は直線的に開きながら立ち上がる口縁部を有し、内外面はハケメ調整である。30は鍋で口縁端部を上方につまみ上げる。胴部内面はカキメ調整である。31は平瓦で、外面に平行タキ、内面にはやや粗い布目が残る。9世紀代の所産とみられる。32は棒状の支脚で、穴が貫通している。外面は、被熱による赤色化が認められた。33・34は中世土師器の皿である。33はP259出土の個体で、口縁部周近に油煙が付着しており、更に被熱痕も認められる。油煙は部分的に落とされており、その後被熱による赤色化が推定される。13世紀後半の所産とみられる。34はP536出土のもので小破片のため、14～15世紀と時期幅をもって捉えておく。35は瀬戸・美濃の天目茶碗で、錆軸の上から鉄軸が施されている。大窯期か。36・37は加賀焼の甕で、36がSE201出土の体部、37がSE202出土の底部である。37の外面は縦方向のケズリ調整である。38は石鉢で口縁部内面に煤が残る。39は砥石で4面を利用している。40・41は鉄滓で、41は炉壁と接していた部分であろうか。

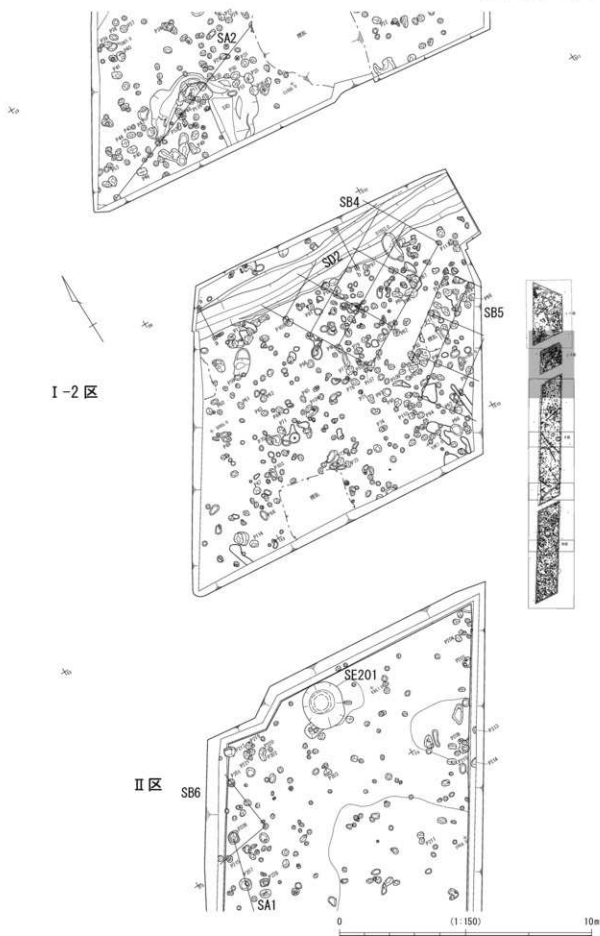
引用・参考文献

- 川畑謙二・坂下義規 1998 『鳥遺跡』石川県小松市教育委員会
 川畑 誠 1995 「石川県内の古代建物に関する基礎的考察—掘立柱建物の平面プランを中心に—」『年報6』社団法人石川県埋蔵文化財保存協会
 田嶋明人 1988 「古代土器編年軸の設定」『シンポジウム北陸古代土器研究の現状と課題』石川考古学研究会・北陸古代土器研究会
 宮下幸夫・田嶋正和・藤田邦雄・垣内光次郎 1990 「中世加賀の窯業研究—加賀焼の現状と課題—」『石川考古学研究会々誌』第33号 石川考古学研究会
 宮田 明 2014 『鳥遺跡発掘調査』『小松市内遺跡発掘調査報告書X』石川県小松市教育委員会

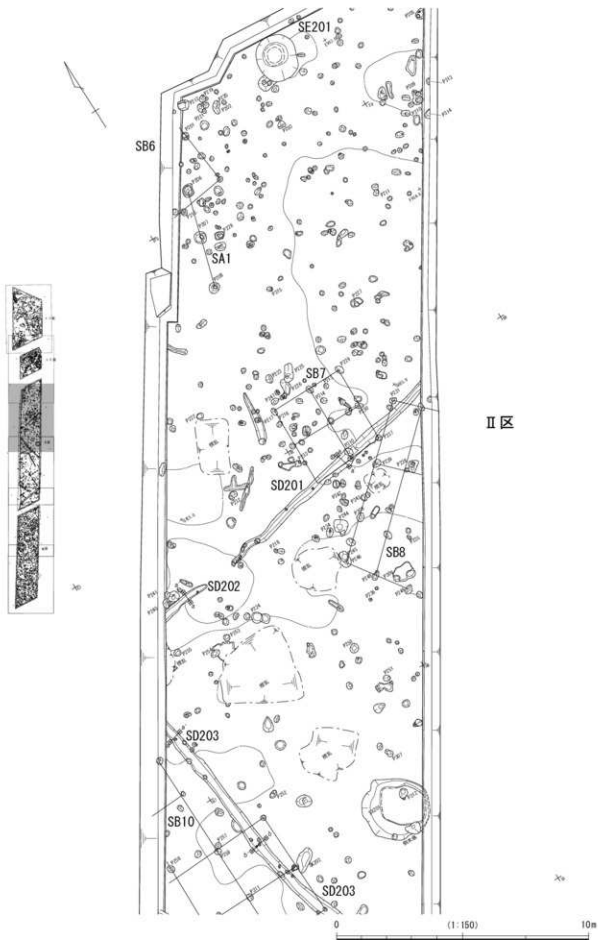
I-1区



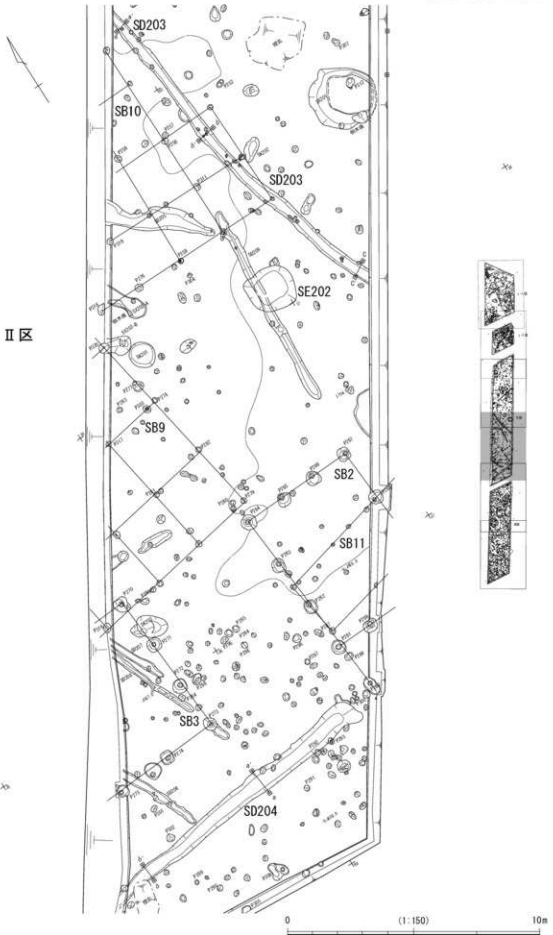
第7図 遺構配置図1 (S=1/150)



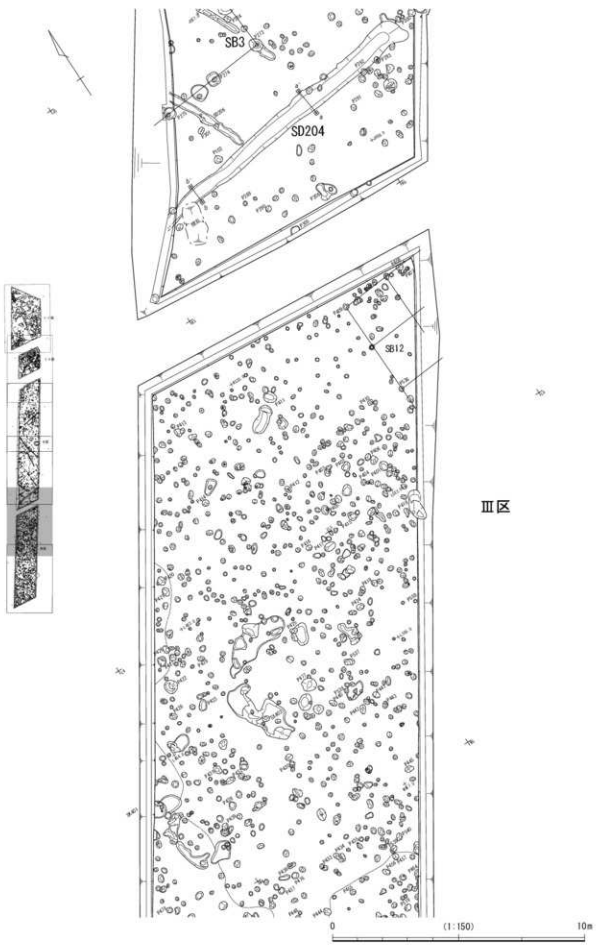
第8図 遺構配置図2 (S=1/150)



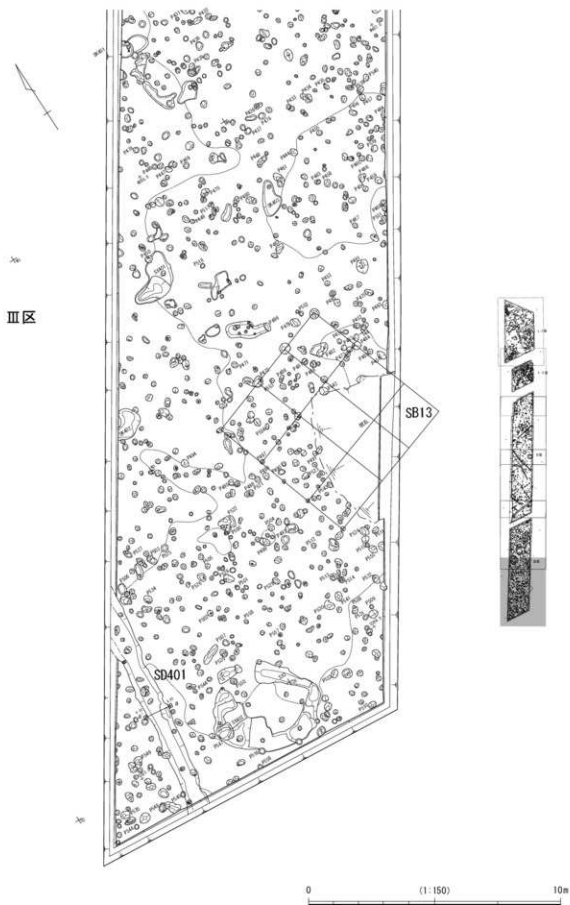
第9図 遺構配置図3 (S=1/150)



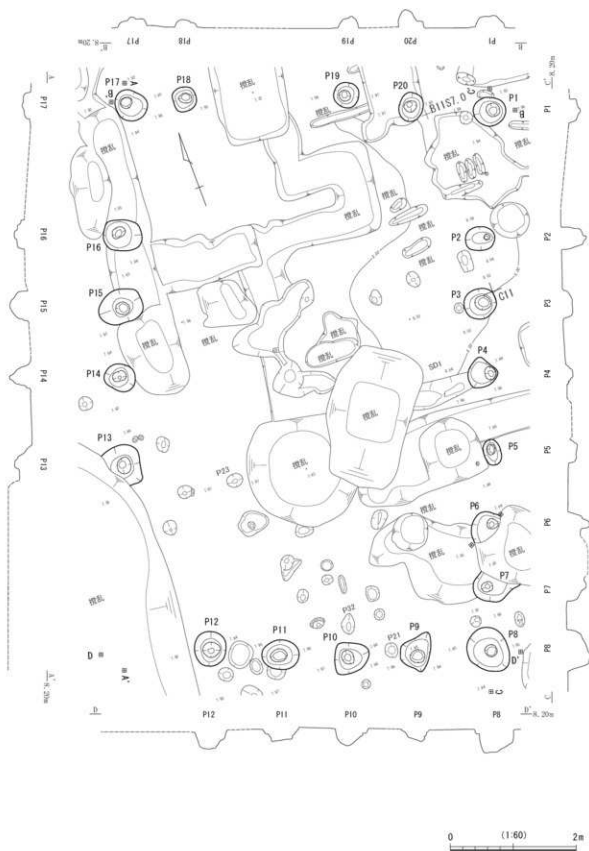
第10図 遺構配置図4 (S=1/150)



第11図 遺構配置図5 (S=1/150)

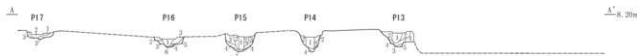


第12図 遺構配置図6 (S=1/150)



第13图 SB1平面图·断面图 (S=1/60)

SB1



P13

2. SV3/3層オリーブ褐色粘質土(堆山が直径5~10mmで10%混じる 粘性あり
しまりややなし。柱状)
2. SV3/3層オリーブ褐色粘質土(堆山が直径5~10mmで7%混じる 粘性あり
しまりややなし)
2. SV3/3層オリーブ褐色粘質土(堆山が直径5~10mmで40%パッチ状に分布
粘性あり しまりややなし)
2. SV3/3層オリーブ褐色粘質土(堆山が直径5mmで1%以下混じる 粘性あり
しまりややなし)
- 10TR4-6褐色細~中粒砂質粘土(粘性あり しまり非常にあり 硬化部分)

P14

1. 2. SV3/3層オリーブ褐色粘質土(堆山が直径10mmで2~4%混じる
下位層部に分布 粘性あり しまりややなし)
2. SV3/3層オリーブ褐色粘質土(堆山が直径5~10mmで5~8%混じる
粘性あり しまりややなし)
2. SV3/3層オリーブ褐色粘質土(堆山が直径5~10mmで50%混じる
粘性あり しまりややなし)
- 10TR4-6褐色細~中粒砂質粘土(粘性あり しまり非常にあり 硬化部分)

P15

1. 2. SV3/3層オリーブ褐色粘質土(堆山が直径5mmで1~2%混じる 粘性あり
しまりなし 本の根の可能性あり)
2. SV3/3層オリーブ褐色粘質土(堆山が直径5mmで5%混じる 粘性あり
しまりなし。柱状)
2. SV3/3層オリーブ褐色粘質土(堆山が直径5mmで1~2%混じる
粘性あり しまりなし 本の根の可能性あり)
2. SV3/3層オリーブ褐色粘質土(堆山が直径5~10mmで5%レンズ状に分布
粘性あり しまりややあり)
- 10TR4-6褐色細~中粒砂質粘土(粘性あり しまり非常にあり 硬化部分)

P16

1. 2. SV3/3層オリーブ褐色粘質土(堆山が直径5mmで1~2%混じる
粘性あり しまりややあり 柱状)
2. SV3/3層オリーブ褐色粘質土(堆山が直径5mmで1%混じる
粘性あり しまりややあり)
2. SV3/3層オリーブ褐色粘質土(堆山が直径1mmで3%混じる
粘性あり しまりややあり)
- 堆山に2. SV3/3層オリーブ褐色粘質土が直径5~10mmで5~10%レンズ状に分布
粘性あり しまり非常にあり 硬化部分?
- 堆山に2. SV3/3層オリーブ褐色粘質土が直径5~10mmで10%不明確に分布
- 10TR4-6褐色細~中粒砂質粘土(粘性あり しまり非常にあり
下位に酸化鉄沈着 硬化部分)

P17

1. 2. SV3/3層オリーブ褐色粘質土(堆山が直径5mmで1~3%以下混じる
粘性あり しまりややなし)
2. SV3/3層オリーブ褐色粘質土(堆山が直径5~10mmで10%混じる
粘性あり しまりややなし)
- 10TR4-6褐色細~中粒砂質粘土(粘性あり しまり非常にあり
下位に酸化鉄沈着 硬化部分)



P1

1. 2. SV3/3層オリーブ褐色粘質土(堆山が直径5mmで1%以下混じる
粘性あり しまりややなし。柱状)
2. SV3/3層オリーブ褐色粘質土(堆山が直径5mmで10%混じる
粘性あり しまりややなし)
2. SV3/3層オリーブ褐色粘質土(堆山が直径5~10mmで2%混じる
粘性あり しまりややなし)
- 10TR4-6褐色細~中粒砂質粘土(堆山に2. SV3/3層オリーブ褐色粘質土が
直径10mmで2~5%混じる)

P17

1. 2. SV3/3層オリーブ褐色粘質土(堆山が直径5mmで1%以下混じる
灰化物1%混じる 粘性あり しまりややなし。柱状)
2. SV3/3層オリーブ褐色粘質土(堆山が直径5~10mmで10%混じる
粘性あり しまりややなし)
- 堆山に2. SV3/3層オリーブ褐色粘質土が直径5~10mmで不明確に分布
粘性あり しまりややあり)
- 10TR4-6褐色細~中粒砂質粘土(粘性あり しまり非常にあり
下位に酸化鉄沈着 硬化部分)

P18

1. 2. SV3/3層オリーブ褐色粘質土(堆山が直径5mmで2%混じる
粘性あり しまりややなし)
2. SV3/3層オリーブ褐色粘質土(堆山が直径5~10mmで
10%ややレンズ状に分布 粘性あり しまりややなし)
2. SV3/3層オリーブ褐色粘質土(堆山が直径5mmで10%レンズ状に分布
粘性あり しまりやや)

P19

1. 2. SV3/3層オリーブ褐色粘質土(堆山が直径5mmで1%以下混じる
粘性あり しまりややなし)
2. SV3/3層オリーブ褐色粘質土(堆山が直径5mmで1%混じる
粘性あり しまりややなし)
2. SV3/3層オリーブ褐色粘質土(堆山が直径5mmで3%混じる
粘性あり しまりややなし)
- 10TR4-6褐色細~中粒砂質粘土(粘性あり しまり非常にあり 硬化部分)

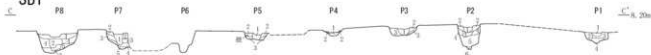
P20

1. 2. SV3/3層オリーブ褐色粘質土(堆山が直径5mmで1%以下混じる
粘性あり しまりややなし)
2. SV3/3層オリーブ褐色粘質土(堆山が直径5mmで1%混じる
粘性あり しまりややなし)
2. SV3/3層オリーブ褐色粘質土(堆山が直径5mmで10%混じる
粘性あり しまりややなし)
2. SV3/3層オリーブ褐色粘質土(堆山が直径5~10mmで10%混じる
粘性あり しまりややなし)
2. SV3/3層オリーブ褐色粘質土(堆山が直径5~10mmで2~3%混じる
粘性あり しまりややあり)
- 10TR4-6褐色細~中粒砂質粘土(粘性あり しまり非常にあり 硬化部分)



第14図 SB1土層断面図1 (S=1/60)

SB1



P1

1. 2.5V3/30堆オリーブ褐色粘質土(堆山が直径5mで1%以下混じる粘性ありしまりややなし(柱状))
2. 2.5V3/30堆オリーブ褐色粘質土(堆山が直径5~10mで2%混じる粘性ありしまりややなし)
3. 2.5V3/30堆オリーブ褐色粘質土(堆山が直径5mで10%混じる粘性ありしまりややなし)
4. 2.5V3/30堆オリーブ褐色粘質土(堆山が直径5~10mで2%混じる粘性ありしまりややなし)

P3

1. 2.5V3/30堆オリーブ褐色粘質土(堆山が直径5~10mで5~1%レンズ状に混じる粘性ありしまりややあり(柱状))
2. 2.5V3/30堆オリーブ褐色粘質土(堆山が直径5mで1~2%混じる粘性ありしまりややあり(しりしりやなし))
3. 2.5V3/30堆オリーブ褐色粘質土(堆山が直径5~10mで10~20%混じる粘性ありしまりややあり)

P5

1. 2.5V3/30堆オリーブ褐色粘質土(堆山が直径5mで3%レンズ状に混じる粘性ありしまりややあり(柱状))
2. 2.5V3/30堆オリーブ褐色粘質土(堆山が直径5mで1~2%混じる粘性ありしまりややあり(しりしりやなし))
3. 10YR4/3に多い黄褐色粘土(10YR4/3に多い黄褐色粘質土が直径10mで30%混じる粘性ありしまりややあり)

P7

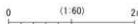
1. 2.5V3/30堆オリーブ褐色粘質土(堆山が直径5mで1%混じる粘性ありしまりややなし(柱状))
2. 2.5V3/30堆オリーブ褐色粘質土(堆山が直径5mで1%以下混じる粘性ありしまりややなし)
3. 2.5V3/30堆オリーブ褐色粘質土(堆山が直径5mで10%混じる粘性ありしまりややなし)
4. 10YR4/3に多い黄褐色粘土(堆山が直径5~10mで20~30%混じる粘性ありしまりややなし)
5. 2.5V6/4に多い黄色粘粒凝り粘土(しまり非常にあり(硬化部分))

P8

1. 2.5V3/30堆オリーブ褐色粘質土(堆山が直径5mで1~2%混じる炭化物1%含む粘性ありしまりややなし)
2. 2.5V3/30堆オリーブ褐色粘質土(堆山が直径5mで2%混じる粘性ありしまりややなし(柱状))
3. 2.5V3/30堆オリーブ褐色粘質土(堆山が直径5mで5~10%混じる粘性ありしまりあり(硬化部分))
4. 2.5V3/30堆オリーブ褐色粘質土(堆山が直径5~10mで5%混じる粘性ありしまりややなし)
5. 10YR4/3に多い黄褐色粘質土(堆山が直径5~10mで20~30%レンズ状に分布粘性ありしまりややあり)
6. 10YR4/3に多い黄褐色粘質土(堆山が直径5mで30~50%混じる粘性ありしまりややあり)

P10

1. 2.5V3/30堆オリーブ褐色粘質土(堆山が直径5mで1%混じる粘性ありしまりややなし(柱状))
2. 2.5V3/30堆オリーブ褐色粘質土(堆山が直径5~10mでレンズ状に分布粘性ありしまりあり)
3. 2.5V3/30堆オリーブ褐色粘質土(堆山が直径10~20mでレンズ状に分布粘性ありしまりややなし)
4. 2.5V3/30堆オリーブ褐色粘質土(堆山が直径5mで2~3%混じる粘性ありしまりややなし)
5. 10YR4/6褐色粘土(粘粒凝り粘土(しまり非常にあり(硬化部分))



P2

1. 2.5V3/30堆オリーブ褐色粘質土(粘性ありしまりややなし(柱状))
2. 2.5V3/30堆オリーブ褐色粘質土(堆山が直径5mで1%以下混じる粘性ありしまりややなし)
3. 2.5V3/30堆オリーブ褐色粘質土(堆山が直径5~10mで20~30%パッチ状に混じる粘性ありしまりややなし)
4. 2.5V3/30堆オリーブ褐色粘質土(堆山が直径5~10mで20~30%レンズ状に混じる粘性ありしまりややなし)
5. 2.5V3/30堆オリーブ褐色粘質土(堆山が直径5~10mで20~30%パッチに混じる粘性ありしまりややあり)
6. 2.5V3/30堆オリーブ褐色粘質土(粘性ありしまりなし(柱状))

P4

1. 10YR4/3に多い黄褐色粘質土(堆山に2.5V3/30堆オリーブ褐色粘質土が直径5~10mで20~40%レンズ状に分布粘性ありしまりあり(硬化部分))
2. 10YR4/3に多い黄褐色粘質土(堆山に2.5V3/30堆オリーブ褐色粘質土が直径5~10mで1%混じる粘性ありしまりややなし)



P6

1. 2.5V3/30堆オリーブ褐色粘質土(堆山が直径5mで1%以下混じる粘性ありしまりややあり(柱状))
2. 2.5V3/30堆オリーブ褐色粘質土(堆山が直径5~10mで1~2%混じる粘性ありしまりややあり)
3. 2.5V3/30堆オリーブ褐色粘質土(堆山がブロックが下に直径30~100mm分布粘性ありしまりややあり)
4. 2.5V6/4に多い黄色粘粒凝り粘土(しまり非常にあり(硬化部分))

P8

1. 2.5V3/30堆オリーブ褐色粘質土(堆山が直径5mで1~2%混じる炭化物1%含む粘性ありしまりややなし)
2. 2.5V3/30堆オリーブ褐色粘質土(堆山が直径5mで2%混じる粘性ありしまりややなし(柱状))
3. 2.5V3/30堆オリーブ褐色粘質土(堆山が直径5mで5~10%混じる粘性ありしまりあり(硬化部分))
4. 2.5V3/30堆オリーブ褐色粘質土(堆山が直径5~10mで5%混じる粘性ありしまりややなし)
4. 10YR4/3に多い黄褐色粘質土(堆山が直径5~10mで20~30%レンズ状に分布粘性ありしまりややあり)

P9

1. 2.5V3/30堆オリーブ褐色粘質土(堆山が直径5mで1%混じる粘性ありしまりややなし(柱状))
2. 2.5V3/30堆オリーブ褐色粘質土(堆山が直径5~10mで30~40%レンズ状に分布粘性ありしまりややあり(柱当たり部分))
3. 10YR4/3に多い黄褐色粘質土(堆山が直径5~10mで30~40%混じる粘性ありしまりややあり)
4. 2.5V3/30堆オリーブ褐色粘質土(堆山が直径5mで10%混じる粘性ありしまりややなし)

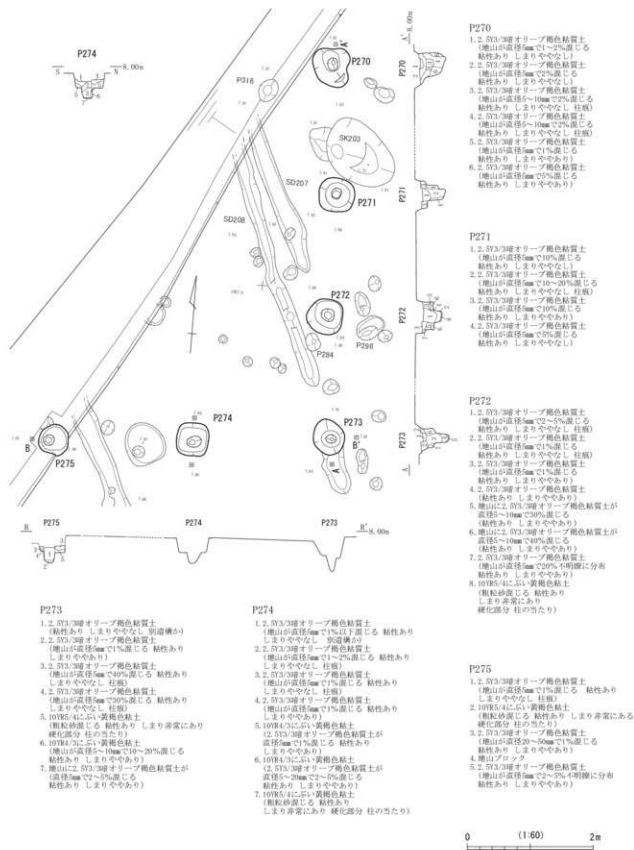
P11

1. 2.5V3/30堆オリーブ褐色粘質土(堆山が直径5mで1%以下混じる粘性ありしまりややなし)
2. 10YR4/3に多い黄褐色粘質土(堆山が直径5~10mで30%混じる粘性ありしまりなし)
3. 2.5V3/30堆オリーブ褐色粘質土(堆山が直径5mで2~5%混じる粘性ありしまりあり)
4. 2.5V3/30堆オリーブ褐色粘質土(堆山が直径5~10mで2~3%混じる粘性ありしまりあり(下に層状沈沈))

P12

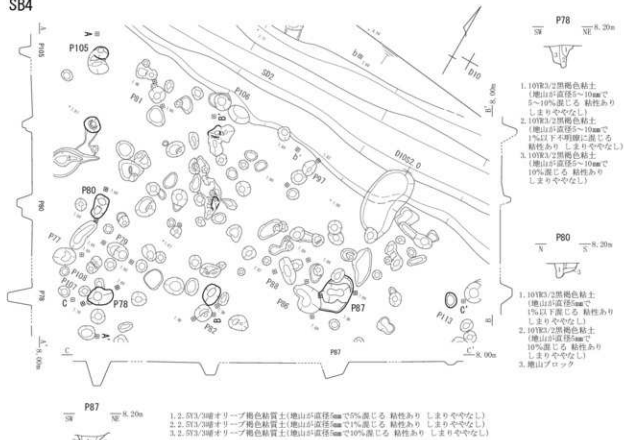
1. 2.5V3/30堆オリーブ褐色粘質土(堆山が直径5~10mで1%混じるパッチレンズ状に分布粘性ありしまりややなし(柱状))
2. 2.5V3/30堆オリーブ褐色粘質土(堆山が直径5~10mで2%混じる粘性ありしまりややなし)
3. 2.5V3/30堆オリーブ褐色粘質土(堆山が直径5~10mで5%混じる粘性ありしまりややなし)
4. 堆山ブロック
5. 10YR4/6に多い褐色粘土(粘粒凝り粘土(しまり非常にあり(下に層状沈沈)粘性 硬化部分))

第15図 SB1土層断面図2 (S=1/60)

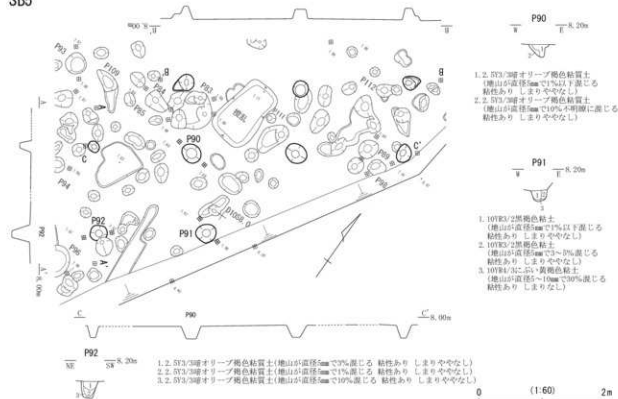


第17図 SB3平面図・土層断面図 (S=1/60)

SB4

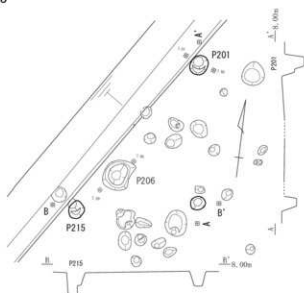


SB5



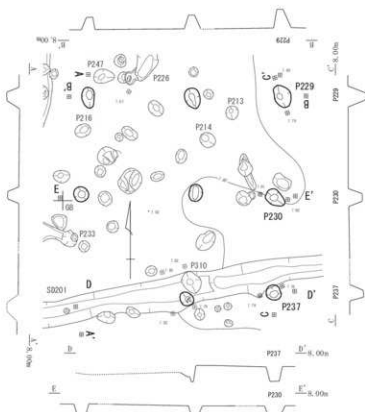
第18図 SB4・SB5平面図・土層断面図 (S=1/60)

SB6



1. 10%R1/2黒褐色粘土
(堆山が直径10~20mmで1~2%混じる
粘性あり しまりややあり)
2. 5%V3/3暗オリーブ褐色粘質土
(堆山が直径10~20mmで1%混じる
粘性あり しまりややなし。付録)
3. 2.5%V3/3暗オリーブ褐色粘質土
(堆山が直径10~20mmで10%混じる
粘性あり しまりなし)
4. 堆山アロックス

SB7



1. 2.5%V3/3暗オリーブ褐色粘質土
(堆山が直径5mmで1~2%混じる
粘性あり しまりややなし)
2. 10%R1/2黒褐色粘土
(堆山が直径5mmで5~10%混じる
粘性あり しまりややなし)
3. 10%R1/2黒褐色粘土
(堆山が直径5mmで10%混じる
粘性あり しまりややなし)



1. 2.5%V3/3暗オリーブ褐色粘質土
(堆山が直径5mmで1%以下混じる
粘性あり しまりややあり)
2. 堆山土 5%V3/3暗オリーブ褐色粘質土が
直径5mmで3%混じる。(粘性あり
しまりややあり)

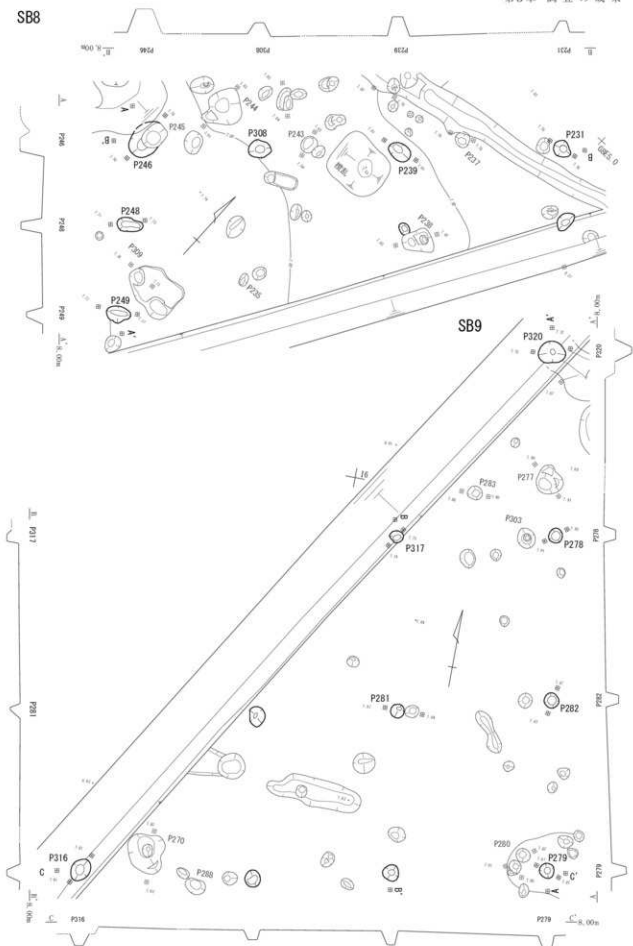


1. 2.5%V3/3暗オリーブ褐色粘質土
(堆山が直径5mmで1%以下混じる
粘性あり しまりややあり)
2. 10%R1/2黒褐色粘土
(堆山が直径5mmで5%混じる
粘性あり しまりややあり)

0 (1:50) 2m

第19図 SB6・SB7平面図・土層断面図 (S=1/60)

SB8



第20図 SB8・SB9平面図・断面図 (S=1/60)

0 (1:60) 2m

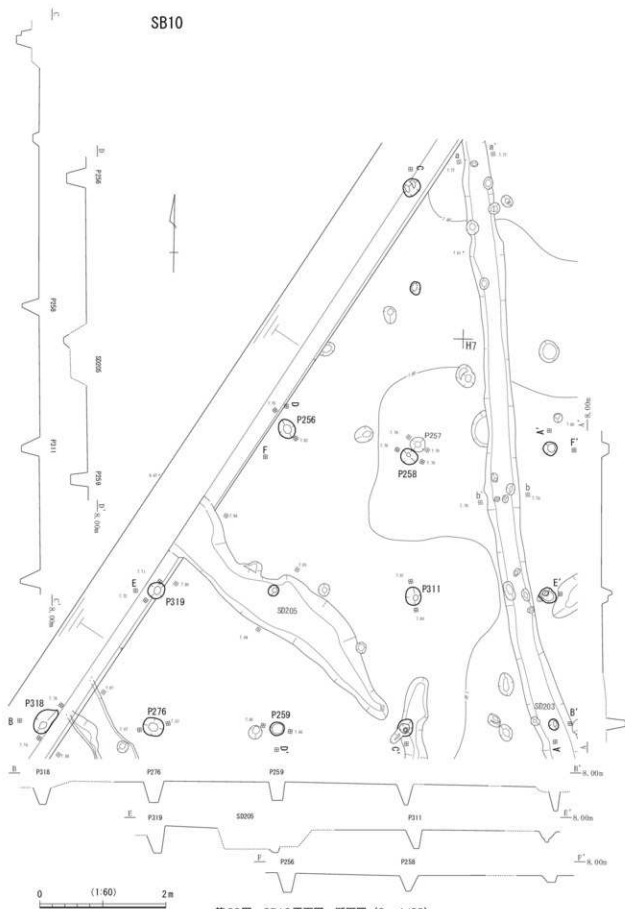
SB8

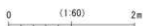


SB9



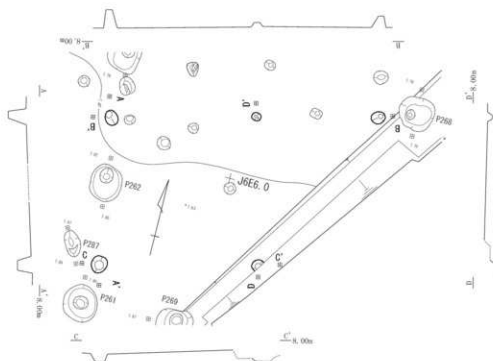
第21図 SB8・SB9 土層断面図 (S = 1/60)



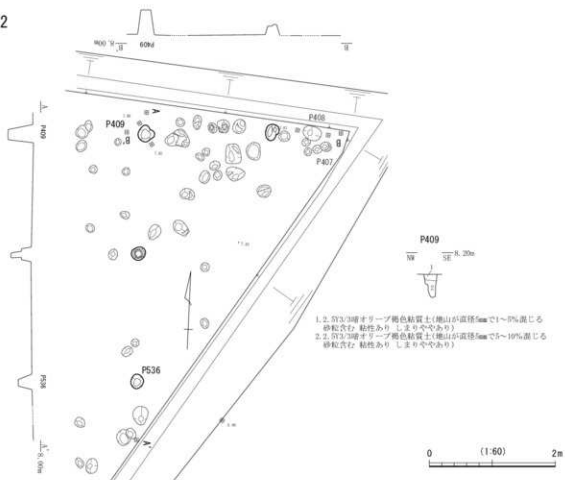


第23図 SB10平面図・土層断面図 (S=1/20・S=1/60)

SB11

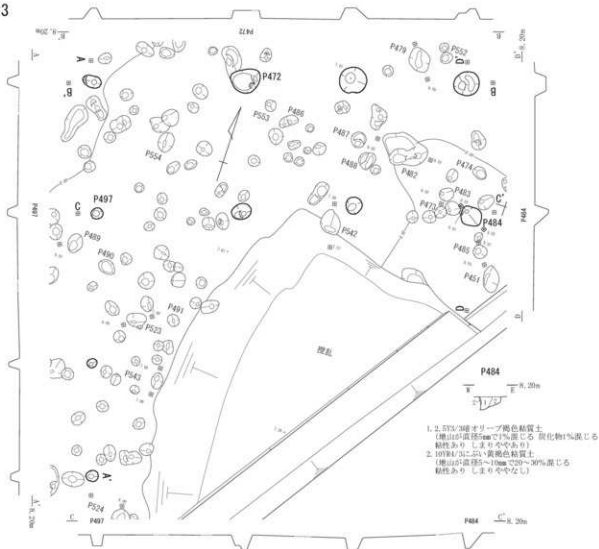


SB12

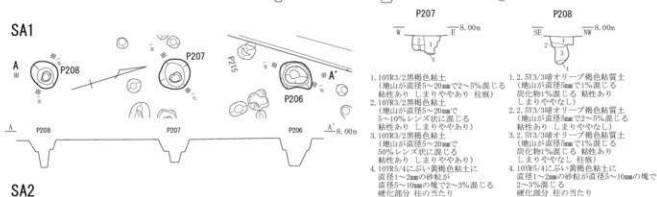


第24図 SB11・SB12平面図・土層断面図 (S=1/60)

SB13



SA1

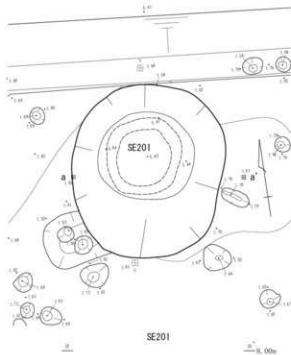


SA2

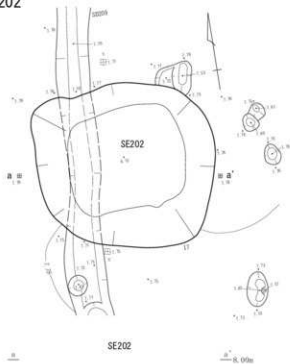


第25図 SB13・SA1・SA2平面図・土層断面図 (S=1/60)

SE201



SE202

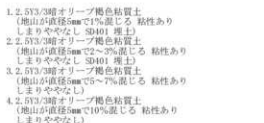
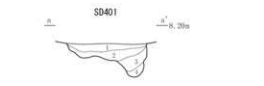
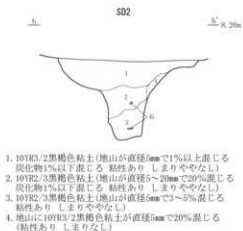
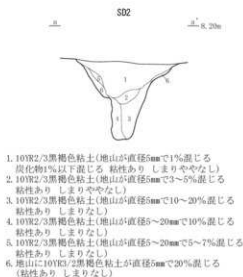


1. 10VR2/3黒褐色粘土
(粘性あり しまりややなし)
2. 10VR3/3暗褐色粘土
(地山が直径10~20mmで5%混じる
粘性あり しまりややなし)
3. 10VR2/3黒褐色粘土
(地山が直径5mmで1%混じる
粘性あり しまりややなし)
4. 10VR5/6黄褐色粘土
(地山ブロックの集合体あり
粘性あり しまりややなし)
5. 10VR3/4暗褐色シルト質粘土に粗~極粗粒砂混じり
(地山が直径30~50mmで40%混じる
粘性あり しまりややなし)
6. 10VR2/3黒褐色粗~極粗粒砂混じり粘土
(地山が直径10mmで1%混じる
粘性あり しまりややなし)
7. 10VR3/3暗褐色粗~極粗粒砂混じり粘土
(地山が直径10mmで1%混じる
粘性あり しまりややなし)
8. 10VR3/3暗褐色粗~極粗粒砂混じり粘土
(地山が直径10mmで1%混じる
粘性あり しまりややなし 7よりしまりなし)
9. 地山ブロック
10. 2.5/6/3にぶい黄色シルト質粘土に粗~極粗粒砂混じる

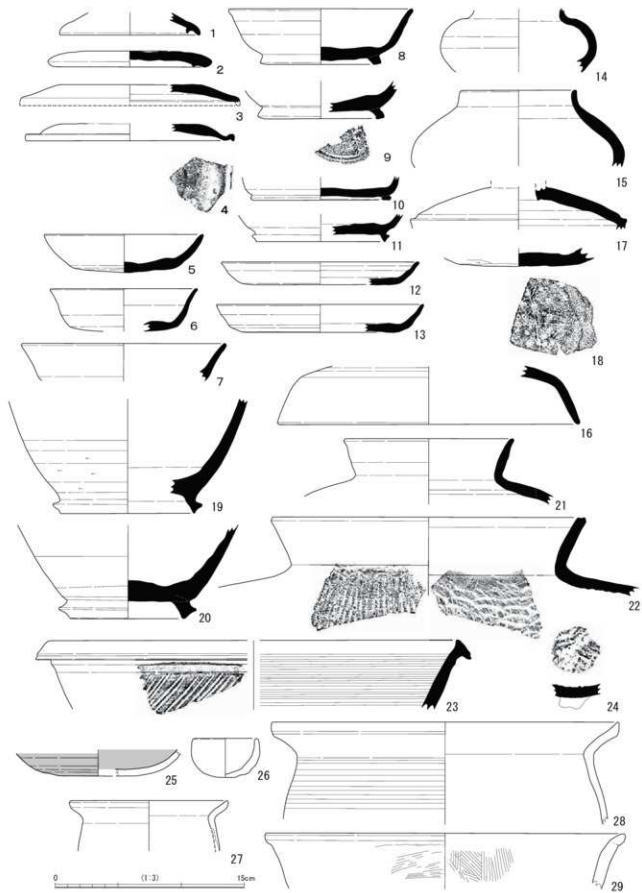
1. 10VR2/3黒褐色粘土
(地山が直径5mmで1%混じる
下位ほど密に分布
粘性あり しまりややなし)
2. 10VR2/2黒褐色粘土
(粘性あり しまりややなし)
3. 10VR4/3にぶい黄褐色粘土
(地山が直径5~20mmで10~20%混じる
粘性あり しまりややなし)
4. 10VR2/3黒褐色粘土
(地山が直径5~10mmで1~2%混じる
粘性あり しまりややなし)
5. 10VR2/3黒褐色粘土
(地山が直径5~10mmで1%混じる
粘性あり しまりややなし)
6. 2.5/3/3暗オリーブ褐色粘質土
(地山と5.が直径5~20mmで斑状に分布)
7. 2.5/4/3オリーブ褐色粗~極粗粒砂混じり粘土
(砂層と粘土が厚さ20~30mmの互層)
8. 2.5/5/3黄褐色粗~極粗粒砂
(ややラズチ状を呈する 尚法良好)
9. 2.5/3/2黒褐色粘土質シルトに粗~極粗粒砂混じる
(尚法やや良好)
10. 2.5/5/3黄褐色粗~極粗粒砂 (尚法良好)



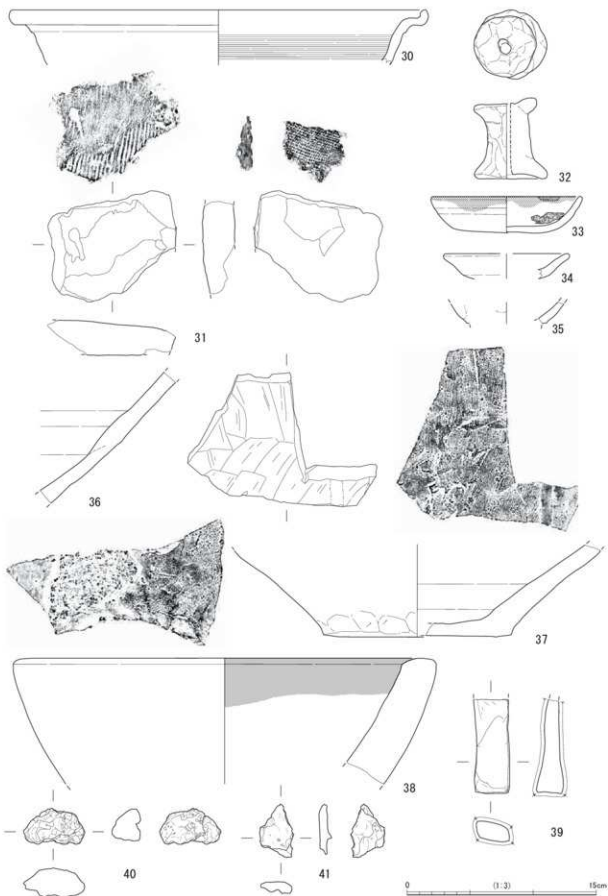
第26図 SE201・SE202平面図・土層断面図 (S=1/40)



第27図 SD2・SD201～204・SD401土層断面図 (S=1/40)



第28図 土器 (S=1/3)



第29図 土器・石製品・鉄滓 (S=1/3)

第3表 出土遺物観察表

探検番号	資料番号	地区	出土地点	種類	口径(mm) 底径(cm)	口径(mm) 底径(cm)	器高(mm) 厚さ(cm)	色調(内) 色調(外)	粘土	焼成	面割(内) 面割(外)	透率	備考	
28	1	0004	Ⅱ	甕丸中	甕形器蓋	11.0	-	1.75	オリーブ灰 灰	粗砂少	良	ロクロナデ ロクロナデ	口縁 2/12	かぶり内側一部自然蝕
28	2	0018	I-2	甕形器蓋	11.8	-	1.25	灰 灰	石英、黒色粒	やや 良	ロクロナデ ロクロナデ	口縁 2/12	表面に砂多 つまみなし、黒色粒少	
28	3	0011	Ⅱ	甕形器蓋	-	11.0	1.4	灰白 オリーブ灰	粗砂や多、粗砂少	良	ロクロナデ 口縁へつ切後ロクロナデ	口縁 1/12	ヘラ記号、 外側面は焼き色あり	
28	4	0029	I-1	甕丸中	16.4	-	(1.26)	黄灰 黄灰	粗砂多	良	ロクロナデ へつ切後ナデ、ロクロナデ	口縁 1/12	ヘラ記号、 外側面は焼き色あり	
28	5	0024	I-2	甕形器蓋	12.5	8.8	3.0	灰 灰	粗砂少、粗砂少	良	ロクロナデ ロクロナデ	口縁 1/12	内外面口縁付近腐食	
28	6	0003	Ⅲ	甕丸中	11.6	8.5	3.4	灰白 灰白	粗砂少、粗砂多	良	ロクロナデ、ナデ ロクロナデ	口縁 3/12	一部も膨れのため 器身が厚い	
28	7	0027	I-1	P103	甕形器蓋	16.0	-	(2.9)	にこい にこい	粗砂多	良	ロクロナデ ロクロナデ	口縁 1/12	
28	8	0030	I-1	甕丸中	14.5	9.6	4.4	灰黄 灰黄	粗砂多	やや 不具	ロクロナデ ロクロナデ	口縁 1/12	口縁へつ切後ナデ	
28	9	0026	Ⅲ	P500	甕形器蓋	-	(10.6)	(2.8)	灰黄 灰黄	粗砂多、粗砂多	良	ロクロナデ ロクロナデ	底 1/12	ヘラ記号
28	10	0033	I-1	甕丸中	甕形器蓋	-	10.0	(2.2)	灰 灰	粗砂多	良	ロクロナデ ロクロナデ	底 5/12	
28	11	0019	I-2	表土除去中	甕形器蓋	-	10.8	(1.8)	灰白 灰白	粗砂少、粗砂少	やや 不具	ロクロナデ、ナデ ロクロナデ	底 2/12	底面にスジ状の工具痕あり
28	12	0028	I-1	甕丸中	甕形器蓋	15.5	12.4	1.8	灰黄 灰黄	粗砂多	良	ロクロナデ ロクロナデ	口縁 1/12	口縁へつ切後ナデ
28	13	0009	Ⅱ	海神津水溝 掘出時	甕形器蓋	16.4	12.6	2.2	灰白 灰白	粗砂少、粗砂多	良	ロクロナデ ロクロナデ	口縁 1/12	口縁へつ切後
28	14	0034	I-1	甕丸中	甕形器蓋	-	-	(5.0)	灰黄 灰黄	粗砂多、粗砂多、 黒色粒少	良	ロクロナデ、ナデ ロクロナデ	側 4/12	腐食
28	15	0015	I-1	溝土中	甕形器蓋	10.3	-	(7.7)	灰黄 灰黄	粗砂多、粗砂多	良	ロクロナデ ロクロナデ	口縁 1/12	腐食
28	16	0023	I-1	甕丸中	甕形器蓋	23.8	-	(4.0)	暗灰 黄灰	粗砂多	良	ロクロナデ 口縁へつ切後、ロクロナデ	口縁 1/12	外側に腐食しているため蓋 としたが蓋の可能性がある
28	17	0012	Ⅱ	横出面	甕形器蓋	17.2	-	3.4	灰白 灰白	粗砂少、粗砂多	良	ロクロナデ ロクロナデ	側 3/12	外側腐食
28	18	0025	I-1	甕丸中	甕形器蓋	-	(9.6)	(1.4)	にこい にこい	粗砂多	良	ナデ、ナデ ナデ、ナデ	底 2/12	ヘラ記号「メ」
28	19	0002	Ⅱ	SD401	甕形器蓋	-	10.6	(9.1)	黒 黒	粗砂多、粗砂多	高台 良	ロクロナデ 口縁へつ切後ロクロナデ	高台 3/12	全体に二次焼成
28	20	0010	Ⅱ	海神津水溝 掘出時	甕形器蓋	-	9.0	(7.5)	灰白 灰白	粗砂多、粗砂多	良	ロクロナデ、ロクロナデ 口縁へつ切後、ロクロナデ	口縁 3/12	自然蝕
28	21	0022	I-2	P106	甕形器蓋	13.2	-	5.2	粗砂、粗砂少、 灰白	やや 良	ロクロナデ ロクロナデ	口縁 1/12	口縁、底面あり	
28	22	0036	I-1	甕丸中	甕形器蓋	(24.7)	-	(6.2)	灰 灰	粗砂少、粗砂多	良	ロクロナデ、同心円状の当具痕 ロクロナデ、平行ナデ	口縁 2/12	内外面に自然蝕
28	23	0032	I-1	甕丸中	甕形器蓋	(32.4)	-	(5.45)	灰オリーブ 灰	粗砂多	良	ロクロナデ、カキメ ロクロナデ	口縁 1/12	内外面自然蝕、 ヘラ状工具による文様
28	24	0031	Ⅱ	SD304 a = base 灰	甕形器蓋	-	-	-	不明 白か	粗砂少、粗砂多	良	同心円状の当具痕 平行ナデ	小片	外側に磨耗あり、 横台に転用か
28	25	0008	Ⅱ	P361	土師器蓋	-	6.2	(2.5)	浅黄橙 黄黄	粗砂少、粗砂少、 海神津水溝あり	良	ロクロナデ 口縁へつ切後ロクロナデ	口縁 2/12	内外面磨耗
28	26	0037	I-2	P112	土師器蓋	(4.9)	(1.6)	3.1	灰白 灰白	粗砂少	不具	口縁へつ切後不明 消滅、磨耗の不明	口縁 4/12	全体に磨滅・磨耗著しい
28	27	0006	Ⅱ	P293 取上 No.2	土師器蓋	(12.4)	-	(4.0)	粗砂少、粗砂少	良	磨耗の不明 磨耗の不明	口縁 2/12	全体に磨滅著しい	
28	28	0007	Ⅱ	P293 取上 No.1	土師器蓋	(27.6)	-	(8.1)	粗砂少、粗砂多	良	磨耗の不明 磨耗の不明	口縁 1/12	全体的に磨耗	
28	29	0021	I-2	SD2 b = caec 灰	土師器蓋	(28.4)	-	(4.4)	にこい にこい	粗砂少、粗砂多	良	ナデ、ナデ ナデ、ナデ	口縁 1/12	
28	30	0001	Ⅱ	PS56	土師器蓋	32.8	-	4.4	にこい にこい	やや粗砂、石英、長石、 やや粗砂、粗砂少	やや 良	ロクロナデ、カキメ ロクロナデ、カキメ	口縁 1/12	全体に磨耗
28	31	0017	Ⅱ	SE201 B区	瓦 瓦	(8.8)	(10.1)	(2.8)	灰白 灰黄	やや粗砂、石英、長石、 やや粗砂、粗砂少	やや 良	平行ナデ ナデ、ナデ	小片	断面に分割痕
28	32	0035	I-1	甕丸中	土師器蓋	5.0	5.8	6.4	にこい にこい	粗砂少、粗砂多	良	ナデ、ナデ	底面	外側面自然蝕による着色化
28	33	0013	Ⅱ	P259	土師器蓋	11.8	8.5	2.6	浅黄橙 黄黄	粗砂少、粗砂少	良	ロクロナデ、ナデ ロクロナデ、横面直	底面	内面磨滅、一部油漬を落と した後に焼成し着色化
28	34	0005	Ⅱ	PS56	土師器蓋	(9.7)	-	(2.0)	粗砂少、粗砂少、 粗砂少	良	ロクロナデ ロクロナデ	口縁 1/12	外側面自然蝕	
28	35	0020	I-2	SD2 baseより黒	土師器蓋	-	-	(1.7)	鉄黒-黒 黄黄	やや粗砂	やや 良	ロクロナデ ロクロナデ	側 2/12	中ビンの後鉄蝕
28	36	0016	Ⅱ	SE201 最下層	加焼 加焼	-	-	(10.4)	にこい にこい	粗砂少、粗砂少、 粗砂少、粗砂少	良	ナデ ナデ	小片	横台あり
28	37	0014	Ⅱ	SE202	加焼 加焼	-	(14.9)	(7.3)	にこい にこい	粗砂少、粗砂少、 粗砂少、粗砂少	良	ナデ ナデ	口縁 2/12	内外面自然蝕、外側一部磨 耗あり
28	38	0040	I-2	SD2 base 近く	石鉢	(33.6)	-	(10.0)	-	-	-	-	-	634.7g、口縁付直焼、 内側腐食
28	39	0041	I-1	甕丸	磁石	(7.4)	(2.8)	2.1	-	-	-	-	-	567g、4面とも使用、 腐食
28	40	0038	Ⅱ	SD34 fig = base 灰	鉄片	2.3	4.8	2.3	-	-	-	-	-	39.96g、焼成済か？ 110.4g、炉壁に焼していた 部分
28	41	0039	Ⅱ	SE202 B区	鉄片	4.15	2.8	1.0	-	-	-	-	-	-

第4章 総 括

高遺跡の調査の結果、古墳時代終末期、奈良・平安時代、中世の建物遺構を確認した。掘立柱建物13棟、柵列2条、井戸2基、土坑、溝、小穴などの遺構群があり、古墳時代終末期で掘立柱建物1棟と柵列1条、奈良・平安時代で掘立柱建物2棟と区画溝2条、中世では掘立柱建物10棟、柵列1条、井戸2基の主要遺構で構成されている。帰属時期については、掘立柱建物、柵列、井戸、区画溝などの集落を構成する主要遺構から供伴する土器が極めて少なく、あっても小破片や後世の混入と考えられるものが多い。このため遺構変遷については、配置や主軸方向、建物規模などに拠るところが大きく、多分に概念的な部分が多いことを断っておく。

ここでは、主要遺構を中心にⅠ期（古墳時代終末期）、Ⅱ期（奈良・平安時代）、Ⅲ期（中世）の3時期に分けて変遷を概観し、更に、小松市教育委員会が実施した既往調査との相互関係にも若干触れて総括としたい。

主要遺構の変遷（第30図）

Ⅰ期（古墳時代終末期）

この時期に該当する遺構は、掘立柱建物1棟（SB1）、柵列1条（SA1）で構成される。今回の調査では、最も古い時期として位置づけられる。まず、SB1だがⅠ-1区の東側にあり、桁行8間×梁行5間の側柱建物であり、1間の柱間寸法はおおよそ1.1mと規格的である。床面積は約49.8㎡を測り、規模としては、月津台地上の掘立柱建物の中で最大級の大きさである。しかし、周辺には他の建物の分布が認められず、主軸を同じくするSA1が南西約30m離れて存在するに過ぎない状況である。このSA1は本報告では柵列として報告しているが、掘立柱建物の可能性も否定できない遺構である。いずれにしても、この時期はSB1が1棟あるのみで、この時期の集落構造は判然としれない。なお、後述する小松市教育委員会の調査成果をもとに、この時期の集落の広がりを想定した場合、調査区から東側に求めることができよう。

Ⅱ期（奈良・平安時代）

掘立柱建物2棟（SB2、SB3）、区画溝（SD204、SD401）で構成されており、Ⅱ区の南側を中心に展開している。SB2は桁行4間以上×梁行3間の間仕切柱が付随する側柱建物で、南北棟である。柱間寸法は桁行2.0m、梁行1.5～1.6mであり、桁行の方が長い特徴を有する。SB3は確認できる規模が南北3間×東西2間の側柱建物で、調査区外へ広がる。柱間寸法は南北方向2.0m、東西方向約2.2mで東西方向の方が長い。このためSB1の桁行と梁行の柱間寸法との関係を考慮すると、SB2は梁行が南北に3間で東西棟の可能性が推定されよう。また、SD204を含めて配置を考えた場合、建物と区画溝が整然と配置されている様相が看取できる。なお、建物の棟数が少なく、建て替えなども認められないことから、存続期間の短い建物群であることが指摘できよう。SD204の出土遺物からⅣ2古～Ⅴ1期に帰属すると想定される。

Ⅲ期（中世）

今回の調査で最も多くの建物が確認された時期である。掘立柱建物10棟（SB4～13）、柵列1条（SA1）、井戸2基（SE201、SE202）、土坑、区画溝（SD2、SD201～203）、小穴などで構成されており、Ⅰ-2区からⅡ区を中心に広範囲に展開する。中世では建物の配置や主軸方向などから、更にa～dの4小期に細分した。

・Ⅲa期（13世紀中葉?）：掘立柱建物3棟（SB9、SB11、SB13）、区画溝（SD201～SD203）

この時期は掘立柱建物3棟と、区画溝で構成されている。Ⅱ期の規格的な古代的集落形態から、新たに形成された中世集落の出現期と捉えることができる。Ⅱ区のSB9とSB11はセットで、同時期の可能性のある一群である。SB9の建物規模が大きいため主屋の性格を有し、小規模のSB11が副屋という構成が推定できよう。また、これらの居住域を区画するようにSD201～SD203がほぼ東西方向と南北方向に走る。SD203で主軸方向はN-11°-Wと、やや西方向に振る。SB13はやや離れて位置しているが、主軸が近似しているため、この時期とした。なお、SB9と次期のSB10とは建物範囲が重複もしくは近接していることから、建替えと考えられるが先後関係は切り合い関係が認められないことから判然としない。SB10やSB7などの建物群が構築されたⅢb期や次の段階のⅢc期中世集落の盛期に相当すると考えられることから、ここでは、SB9やSB11をその前段階として捉え、さほど時間を経ずにⅢb期へ移行したと考えておく。帰属時期はⅢb期が13世紀後半であることから、その前段階として便宜的に13世紀中葉を想定しておく。

・Ⅲb期（13世紀後半）：掘立柱建物3棟（SB6、SB7、SB10）、井戸2基（SE201、SE202）

掘立柱建物3棟、井戸2基で構成されており、Ⅱ区からⅢ区の北側にかけて展開している。最も規模の大きい中核的な建物であるSB10を中心に、2間×2間のSB7やSB6が配置されている。また、SB10の南側にはSE202を、SB6の東側にはSE201をそれぞれ伴っており、建物と井戸のセット関係がうかがえる。居住域を区画するような溝の存在は確認されていない。SE201やSE202からは13世紀代の加賀焼甕の底部や胴部の破片が出土しており、また、SB10を構成するP259では土師器皿が埋納されており、13世紀後半に比定される。これらのことは、SB10が13世紀後半頃に廃絶した蓋然性が高いことを示している。

・Ⅲc期（14世紀～15世紀）：掘立柱建物4棟（SB4、SB5、SB8、SB12）、櫓列1条（SA2）

多数の建物が構築された時期であり、Ⅰ区からⅢ区まで広い範囲で建物が展開する。Ⅲc期は前段階と比較して集落構造や建物構造でやや相違する傾向が顕著となる。前段階では建物群として、一定のまとまりがあったのに対し、この段階では建物群の拡散化・散在化の傾向が指摘できる。また、Ⅲa期やⅢb期でみられたような中核的な建物が認められず、小規模な建物群が分布する。主軸方位についても不規則でやや統一性を欠いており、柱筋が整然と通らない建物や、柱筋の交点に柱が配置されていない建物もみられる。このように、前段階までの集落構造や建物構造において、一定の画一性が保たれなくなっていく段階として捉えることができよう。SB12を構成しているP536からは14～15世紀の土師器皿が出土していることから、やや幅があるものの、この年代観でおさえておく。なお、SA2はSB4もしくはSB5に伴う櫓列の可能性が高く、これより北側は遺構の分布が希薄となる。このため、SA2は建物群を区画する機能を有して構築されたことが推定される。

・Ⅲd期（中近世?）：区画溝（SD2）

この段階では建物が確認されず、中世集落が解体された後の段階と捉えられる。前段階までの建物群が展開していた様相が一転し、この段階に至って畑地や園地などの生産域が広がる景観が想定される。このため、Ⅲc期とⅢd期の間には大きな時間的な間隙が存在すると推定される。区画溝であるSD2は現在の地割に近く、水流による堆積状況が認められないことから、生産域を区画していた可能性が考えられる。このことは、現在の土地利用にまで続く様相を呈していることが指摘できよう。

既往の調査との関連性（第31図）

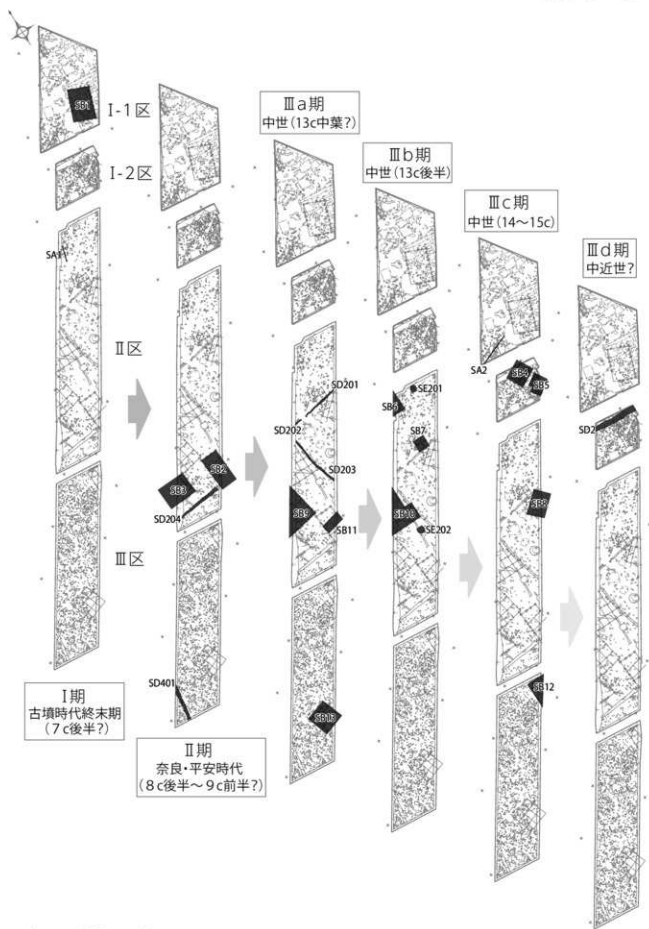
小松市教育委員会が実施した過去の調査は、昭和59年度に市道部分（以下、S59調査）、平成7年

度に農道部分（以下、H7調査）、平成23年度に個人住宅地（以下、H23調査）がある。特に市道部分と農道部分の調査では掘立柱建物3棟、竪穴状土坑10棟、柵列3条などの古墳時代後期から古代の建物群が確認されており、狭い調査範囲の中で大きな成果が得られている。また、出土遺物では8世紀後半から9世紀前半頃の土師器、須恵器を主体に、弥生時代中期から14世紀代までの遺物が出土している。中でも律令制との関わりが強い硯（透かし高台付円面硯や中空円面硯とみられる個体）や祭祀遺物である土馬の出土から役人層の存在を想定されている。また、須恵器窯で使用する焼台や製鉄で使用されるような工具痕が付着した鉄滓などが出土しており、遺跡から南方の丘陵部に展開する南加賀古窯跡群や製鉄遺跡群と、製陶・製鉄に関わった人々との強い関係性が指摘されている。ここでは、小松市教育委員会の主要遺構変遷に、今回の調査成果を加えて、鳥遺跡における古墳時代から古代の主要遺構変遷を概観してみる。

S59調査では、竪穴状土坑5基（SI-1～5）、掘立柱建物2棟（SB-1・2）、柵列跡3条（SA-1～3）の主要遺構が検出されており、H7調査では、竪穴状土坑5基（SI-①～⑤）、掘立柱建物1棟（SB-①）が確認されている。H23調査では明確な建物遺構は確認されていない。

既往の調査の建物変遷では、建物群の軸方向などからA～Dの4群に分けられている。この中で最も古い時期とみられているのは、A群としている一群であるが建物でない可能性もあるということと保留としている。N-48～60°-Eの軸を有し、I 2～II 2期の時期としている。次に最も多数の建物群で構成されているB群では掘立柱建物1棟、竪穴状建物6棟の一群である。N-2～16°-Eの軸を有し、II 3～IV 1期に比定されている。SI②では輪の羽口や鉋跡が多数投棄されている状況から、周辺にまとまった鍛冶工房の存在が推定されている。C群は掘立柱建物と柵列を中心とした一群であり、N-29～34°-Eの軸を有する。IV 2古～V 1期に比定されている。D群はSI④（N-25°-E）の1棟のみで、時期も不確定である。B群と同時期もしくはA群の前段階と推定されているが、ここでは、便宜的に軸方向がC群に移行する段階と捉えて、B群の中でもC群により近い時期に位置づけておく。これらをまとめてみると、A群（I 2～II 2期）⇒B群（II 3～IV 1期）・D群⇒C群（IV 2古～V 1期）という遺構変遷が推定される。

以上、既往の調査を概観したが、ここで今回の調査で確認された建物群が、いつの段階に比定されるかを考えてみたい。I期とした建物群をE群、II期とした建物群をF群とする。E群は掘立柱建物1棟（SB1）と柵列1条（SA1）で構成され、建物構造や包含層の出土遺物などからII 2期と考えられる。F群は、掘立柱建物2棟（SB2・SB3）と区画溝（SD204）で構成されており、概ね8世紀後半～9世紀前半の時期が推定されている。これらを、既往の調査の遺構群（A～D群）との相互関係で捉えた場合、E群はA群とB群の間に、F群はC群に続く時期に展開するという、A群⇒E群⇒B・D群⇒C群・F群という建物群変遷が推定されよう。古代集落の先駆的な成立期はI 2～II 2期（7世紀中葉）の竪穴状土坑を中心とするA群から始まり、II 2期（7世紀後半）の段階では掘立柱建物を伴うE群が展開する。II 3～IV 1期（7世紀末～8世紀中頃）のB群とD群で盛期を迎える。このときB・D群は竪穴状土坑を中心とする集落構造で、建物群が広く展開する様相が確認される。つづくC・F群も依然として多くの建物が構築されるが、掘立柱建物を主体とする集落であり、前段階とは集落構造に大きな変化があることが指摘できよう。このように、鳥遺跡における古代の集落の様相は、概ねII 3～V 1期に最盛期があり、構造的には竪穴建物から掘立柱建物を中心とした集落構造に変化していく様相が看取される。なお、この集落構造の変化については、月津台地とその周辺の集落遺跡の動態はもとより、南加賀古窯跡群や製鉄遺跡群との関わりを視野に入れて、今後再検討が必要と考えられる。



第30図 主要遺構変遷図 (S=1/1,000)



第31図 古墳時代から古代の主要遺構図 (S = 1/1,000)



調査区モザイク写真



I区道構完振状況（真上から）



I区道構完振状況（北西から）



I区SB1 完掘状況 (南から)



I区P14 土層断面 (西から)



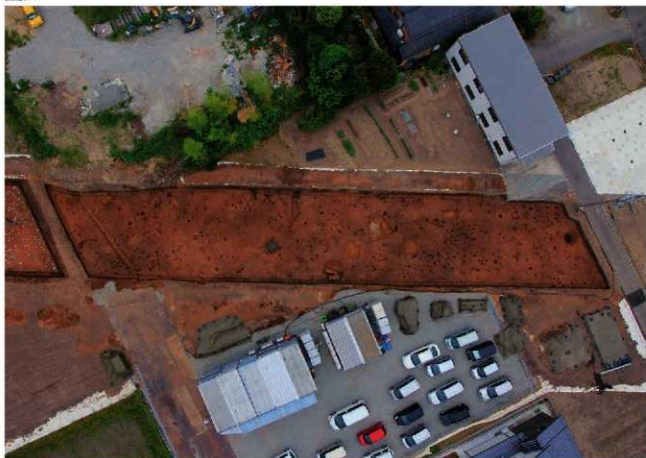
I区P14 硬化層断面 (西から)



I区SD2 完掘状況 (西から)



I区SD2a土層断面 (東から)



Ⅱ区遺構完掘状況（真上から）



Ⅱ区遺構完掘状況（南から）



Ⅱ区SB2柱穴段下げ状況（北から）



Ⅱ区SB2完掘状況（北から）



Ⅱ区SB3完掘状況(南から)



Ⅱ区SB2検出状況(北から)



Ⅱ区P261土層断面(西から)



Ⅱ区P264土層断面(北から)



Ⅱ区P273硬化層断面(東から)



Ⅱ区SB10完掘状況（南から）



Ⅱ区P259土層断面（南西から）



Ⅱ区P259土篩器皿出土状況（南から）



Ⅱ区SE201掘削状況（北東から）



Ⅱ区SE201新割り断面（南西から）



Ⅱ区 SE202 完掘状況 (西から)



Ⅱ区 SD204 完掘状況 (東から)



Ⅱ区 SD204a 土層断面 (東から)



Ⅱ区 SD203 完掘状況 (南から)



Ⅱ区 SD203b 土層断面 (北から)



Ⅲ区遺構完掘状況（真上から）



Ⅲ区SB12完掘状況（南東から）



Ⅲ区SB13完掘状況（南から）



Ⅲ区SD401完掘状況（南から）



Ⅲ区SD401遺物出土状況（東から）



報告書抄録

ふりがな	こまつし しまいせき							
書名	小松市 鳥遺跡							
副書名	北陸新幹線建設事業（金沢・敦賀間）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書1							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	鳥田亮仁							
編集機関	公益財団法人石川県埋蔵文化財センター							
所在地	〒920-1336 石川県金沢市中戸町18番地1 TEL(076)229-4477 FAX(076)229-3731							
発行機関	石川県教育委員会・公益財団法人石川県埋蔵文化財センター							
発行年月日	2019年3月22日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
鳥遺跡	石川県小松市 鳥町地内	17203	324900	36度 20分 54秒	136度 25分 50秒	20170413 ～ 20170731	1,920㎡	記録保存 調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
鳥遺跡	集落跡	古墳時代	掘立柱建物、柵列		須恵器			
		奈良・平安時代	掘立柱建物、溝		土師器、須恵器、 鉄滓			
		鎌倉・室町時代	掘立柱建物、柵列、 井戸、土坑、溝、小穴		土師器、陶磁器、 石製品			
要約	月津台地上に営まれた集落跡で、古墳時代終末期、奈良・平安時代、鎌倉・室町時代を中心とする遺構を確認した。古墳時代終末期では桁行8間×梁行5間の規模を有する側柱建物が、奈良・平安時代では掘立柱建物2棟と区画溝が整然と配置されている様相が確認できた。鎌倉・室町時代では集落が盛期となり、掘立柱建物10棟、井戸2基などを確認した。出土遺物の大部分は奈良・平安時代に属する。							

小松市 鳥遺跡

発行日 平成31(2019)年3月22日

発行者 石川県教育委員会
〒920-8575 石川県金沢市稲月1丁目1番地
電話 076-225-1842 (文化財課)

公益財団法人石川県埋蔵文化財センター
〒920-1336 石川県金沢市中戸町18番地1
電話 076-229-4477
E-mail daihyou@ishikawa-maibun.or.jp

印刷 ソノダ印刷株式会社